

参加アーティスト

平成25年7月10日現在

<http://aichitriennale.jp/>

目次

現代美術	P02
パフォーミングアーツ	P21
プロデュースオペラ「蝶々夫人」	P25
映像プログラム	P27
企画コンペ	P33

現代美術



青木 淳 (あおき じゅん / AOKI Jun)

1956年神奈川県生まれ。東京を拠点に活動。磯崎新アトリエ勤務を経て、1991年に独立し、事務所を設立。「H」(1994)などの住宅を発表し、新しい感覚による知的な空間の操作で脚光を浴びた。90年代後半からは公共施設を手がけ、2000年には青森県立美術館のコンペで1等を獲得。奥行きがないことを逆手にとった設計による、「ルイ・ヴィトン名古屋栄店」(1999)は日本初の独立路店として成功し、世界各地のルイ・ヴィトンでこのスタイルが採用されることになった。また東京国立近代美術館の「連続と侵犯」展(2002)では、アーティストのひとりとして参加し、リノベーション的な手法で美術館の表裏を反転させるような異空間「U bis」を出現させた。ほかにも、TARO NASU GALLERYのインテリアデザイン、青木野枝や杉戸洋らとのコラボレーションなど、美術と建築を架橋するプロジェクトを発表している。今回は、黒川紀章設計のポストモダン建築、名古屋美術館に対し、新しい解釈によって空間や動線の一時的なリノベーションを試みる。それは、ここで展示するアーティストとのやりとりを反映したコラボレーション的な作品にもなるだろう。

「青々荘」2010
photo: 阿野太一



青木野枝 (あおきのえ / AOKI Noe)

1958年東京都生まれ。東京を拠点に活動。1983年武蔵野美術大学大学院造形研究科(彫刻コース)修了。2000年芸術選奨文部大臣新人賞受賞。2003年中原悌二郎優秀賞受賞。2000年に目黒区美術館で「青木野枝展-軽やかな、鉄の森」を開催。80年代初頭より鉄を素材に制作と発表を続ける。鉄板から溶断して切り出し、それを溶接して、つないで制作する。「鉄」の持つ重々しいイメージと塊としての「彫刻」のイメージを見事なまでに払拭した、シンプルで見ると大きく開かれた作品が特徴。美術館の展示室内に限らず、屋外においても、作品を設置することで大気と時間を包みこんだ場所へと変化させるアーティスト。

今回は岡崎で、松應寺の前に作られた木造のアーケードと、それに隣接する旧理容室を利用しての展示を行う。名古屋の納屋橋会場の吹き抜けの空間でも展示する。

《ふりそぐもの-娛樂室》2013
大原美術館・有隣荘での展示風景
photo: 山本紉

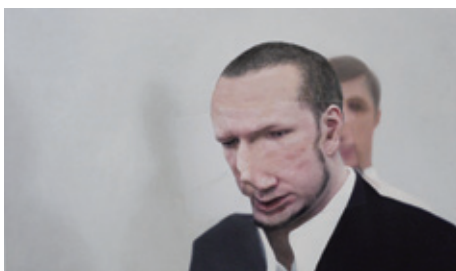


青野文昭 (あおの ふみあき / AONO Fumiaki)

1968年宮城県生まれ。仙台を拠点に活動。リアス・アーク美術館や宮城県美術館などで作品を発表してきた。1990年代から海岸の漂流物など、さまざまな場所で壊れたモノの欠片を拾い、「なおす」と称し、それを補完する制作手法を継続している。だが、青野は再び使えるモノとして正確に復元するのではなく、「修復」を通じてむしろ使えない異物に変容させてしまう。近年は異種混成的な補完も展開している。自身も少なからず被害を受けた東日本大震災の後は、自宅近辺や親戚宅、馴染みの場所をはじめとする被災物件からでた瓦礫を用い、様々なアプローチでその「補完」を試みるにより、あるべき再生の姿を探求している。しかし、別の用途に役立つリサイクルでもなく、機能しない何かを「創造」する姿勢は変わらない。震災という歴史的な事象は彼の作品の意味を変えた。震災前から震災後の制作を変えずに行っていることも特筆すべきである。

今回は壊れたトラックなどを素材に、これまで以上に大型の作品を発表する。

《なおす・代用・合体・侵入・連置-震災後の石巻で回収した廃船の復元》2012
courtesy of the artist



荒井理行 (あらい まさゆき / ARAI Masayuki)

1984年ウィスコンシン州生まれ。大阪を拠点に活動。2011年愛知県立芸術大学大学院美術研究科美術専攻修了。インターネット上の画像や雑誌から切り出してきた写真をコラージュし、現実の世界を写した写真の周囲に絵を描き足して写された場面を拡張することで、現実には有り得ないイメージを再構成する。コラージュされる写真は報道写真から映画の一場面まで様々なものであり、東日本大震災の被災地の写真が利用されていることもある。再構成されたイメージは、現実の社会に対して何らかの解釈を施している場合もあれば、シニカルな視線を投げかけている場合もある。そしてそのイメージによって常に示唆されているのは、現実の出来事が異様な力によって歪められる可能性が存在していることである。今回は新作を中心に構成する。

《Who am I》2013



ブラスト・セオリー (Blast Theory)

1991年設立。ブライトン(イギリス)を拠点に活動。演劇、美術、ストリートカルチャーなどの異分野を横断しながら、現実と仮想現実の間に生じる相互的な関係を探索する作品を発表している。ビデオやコンピュータゲーム、携帯電話など現代社会に欠かせない技術を積極的に用いて、戦争やテロ、あるいは見知らぬ者同士が集まる都市を主題としてとりあげてきた。一方、鑑賞者や参加者は、ゲームに参加したり、都市を移動しながらも、巧みな物語の構成によって個人の内面へと降りていくような体験をする。大学をはじめ、研究機関や文化機関との共同制作も多い。英国で優れた映像作品に授与されるBAFTAのインタラクティブ部門に4回ノミネートされ、2003年アルスエレクトロニカでは金賞を受賞。2009年の第53回ヴェネツィア・ビエンナーレには、アイルランド共和軍 (IRA) とドイツ赤軍のテロリストを題材にした《ウルリーケ・アンド・イーモン・コンプライアント》を出展した。

《Ulrike and Eamon Compliant》2009
Installation view at Venice Biennale, Venice



ジャネット・カーディフ & ジョージ・ビュレス・ミラー (Janet CARDIFF and George BURES MILLER)

カーディフは1957年オンタリオ州ブリュッセルズ(カナダ)生まれ。ビュレス・ミラーは1960年アルバータ州ベークルビル(カナダ)生まれ。共にプリティッシュ・コロンビア州グリンドロッド(カナダ)を拠点に活動。1995年から共同制作を開始。主に音を使ったマルチメディア・インスタレーションで世界的に知られている。代表作にはオーディオガイドやビデオカメラを使用して、会場を巡りながら、音声や映像で語られる物語を追う「ウォーク」シリーズなどがある。彼らの作品は観客が実体験として感じられるような没入型の作品である。2001年には第49回ヴェネツィア・ビエンナーレのカナダ館の代表として参加し、特別賞とベネッセ賞を受賞。ドクメンタ13(2012)など国際展にも多数参加している。

今回はジャネット・カーディフ名で制作された《40声のモテット》を展示する。これは、16世紀の英国を代表する音楽家トマス・タリスが作曲した40の声部からなる声楽曲『我、汝の他に望みなし』を、40人の声で別々に録音し、それを会場に置かれた40個のスピーカーで再構成するものである。

《40声のモテット》2001
© Janet Cardiff & George Bures Miller
courtesy of Gallery Koyanagi, Tokyo
photo: Myoung-Rae Park (Platform Seoul Installation 2008)



ステファン・クチュリエ (Stéphane COUTURIER)

1957年パリ生まれ。パリを拠点に活動。2003年にマルセル・デュシャン賞にノミネートされる。また、同年にはニエプス賞を受賞。フランスを代表する写真家の1人である。彼は自動車工場の内部や宅地開発の現場、大都市の建築物などを撮影した写真で特に知られている。これらの風景には世界規模で進む社会の変化の様相が刻まれており、私たちが生きる世界の流動性がダイナミックに表されている。そのため彼の作品は、建築や美術といった文脈のみならずドキュメンタリーや社会学といった視点から見ても興味深いものとなっている。

今回、紹介する「メルティング・ポイント」シリーズは、実際の建築物を前に撮影した複数のイメージを、一見して分からないように重ね合わせて制作されている。

《Melting Point, Havana no.2》2006-2007
courtesy of the artist



ミッチ・エプスタイン (Mitch EPSTEIN)

1952年マサチューセッツ州生まれ。ニューヨークを拠点に活動。彼の写真はニューヨーク近代美術館を始めとする欧米の美術館に収蔵されており、ボン市立美術館など欧米の公的美術館で、大規模な個展も開催されている。1970年代後半にインド、1990年代にはベトナムを撮影するなどで評価を得た後、アメリカの風景に取り組む。

今回、紹介する彼の代表作「アメリカン・パワー」(2003-2009)は、アメリカの原子力も含む幾つかの発電所とコミュニティ、そして消費の風景を重ね合わせて、ダイナミックに文明論を思わせる規模で緻密に撮影したシリーズで、彼の評価を不動のものとした。

《BP Carson Refinery, California》2007
courtesy of Sikkema Jenkins & Co., New York and Galerie Thomas Zander, Köln



ニナ・フィッシャー & マロアン・エル・サニ (Nina FISCHER and Maroan EL SANI)

1965年エムデン(ドイツ)に生まれビジュアル・コミュニケーションを学んだフィッシャーと、1966年デュイスブルク(ドイツ)に生まれ映画学を修めたエル・サニによるユニット。1993年よりベルリンを拠点にコラボレーションを開始。社会や政治体制の変化の結果、本来の目的を失った建築物や場の歴史、記憶、痕跡、そして複雑に絡み合う人々の思いに注目し、ドキュメンタリー、フィルム、写真、漫画など様々な方法論とメディアを横断した映像作品を制作してきた。世界各地の国際展やレジデンスで活躍する一方、1996年以来日本でも数多くの展覧会に参加。日本で制作された代表作には、軍艦島での撮影取材を基に制作された《Spelling Dystopia/サヨナラハシマ》(2008-2009)など。東日本大震災後も震災前後の人々の日常の変化をテーマにした制作を継続しており、その第一作である《Spirits closing their eyes》(2012)はメディアシティ・ソウル2012に出品された。

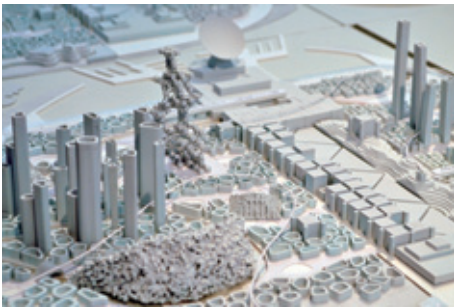
今回は、愛知県内に転入してきた被災者へのインタビューに加え、ビキニ環礁沖水爆実験を受けて黒澤明が制作した映画「生きものの記録」(1955年)をテーマに一般の参加者と演劇ワークショップを行った映像を基にした新作ビデオ・インスタレーションを発表。

《3.11後の生きものの記録》2013
courtesy of the artist

藤森照信(ふじもり てるのぶ / FUJIMORI Terunobu)

1946年長野県生まれ。東京を拠点に活動。建築史家として1974年に建築探偵団を結成し、関東大震災後に登場した平坦なファサードの商店を「看板建築」と命名したり、日本の近代建築研究をきわめる一方、1986年に赤瀬川原平らと路上観察学会を立ちあげ、都市の中に当初と異なる意味が発生したオブジェなどを発見する活動を行う。その後、異形の造形をもつ「神長官守矢史料館」(1991)によって建築家としてデビューし、自邸の「タンポポハウス」(1995)や「高過庵」(2004)など、ユニークな住宅や茶室を手がけ、また施工のために縄文建築団も結成した。土着性を感じさせながら、実際はどこにもない、あるいは見たことがないのに、懐かしさを感じさせる作風は、「インターナショナル・ヴァナキュラー」と呼ばれる。第10回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2006)において、藤森は日本館で自作を紹介し、卓越した功績をあげた展示として公式に高く評価されたのを契機に海外での仕事が増え、イギリス、オーストラリア、台湾などで作品を発表。2012年にミュンヘンで「ウォーキング・カフェ」を制作した。今回出品される「空飛ぶ泥舟」は、宙に浮かぶ茶室である。ユーモラスなデザインが建築の概念に揺さぶりをかけている。

《空飛ぶ泥舟》2010
「藤森照信展 - 諏訪の記憶とフジモリ建築」展(茅野市美術館)での展示風景
photo: 茅野市美術館



藤村龍至(ふじむら りゅうじ / FUJIMURA Ryuji)

1976年東京都生まれ。東京を拠点に活動。東京工業大学で学び、2005年より藤村龍至建築設計事務所を主宰。独自のデザイン手法である超線形設計プロセス論を用いた作品、「BUILDING K」(2008)で注目を集めた。一方でフリーペーパーやウェブマガジンの企画制作、あるいはtwitterなどのメディアを通じた情報発信、また、2012年青森県立美術館「超群島 - ライト・オブ・サイレンス」展などのキュレーションも精力的に行う。東日本大震災後は批評誌の「思想地図β」において、福島県双葉町の住民の集団移転を想定したトリルブクシマの都市計画のほか、国土インフラの脆弱性を改善すべくリスクヘッジを考慮した第二の国土軸、また、ステーションシティを核とした都市の再編成を行う「列島改造論2.0」を発表した。最近では思想家の東浩紀が提唱する「福島第一原発観光地化計画」にも関わり、国土スケールから新しい日本の姿をデザインしようとする野心的な若手建築家である。

今回は展示室をワークインプログレスの計画推進室と見立て、参加者を巻き込みながら、道州制をみずえた新庁舎や名古屋の都市改造を提案していく。

《海市2.0》2010
提供: 藤村龍至建築設計事務所

マーロン・グリフィス (Marlon GRIFFITH)

1976年ポート・オブ・スペイン(トリニダード・トバゴ)生まれ。名古屋を拠点に活動。マスと呼ばれるトリニダードのカーニバルのコスチューム・デザイナーとして活動後、観客も参加できるパレードの作品を制作している。2004年のBag Factory Artists' Studios(ヨハネスブルグ/南アフリカ)でのレジデンスでは、伝統的なマスと仮面制作のワークショップを行い、他のアーティストや地元住民とカーニバルを行った。2008年には光州ビエンナーレのパブリックパフォーマンスイベント「SPRING」で、光州事件とトリニダードのカーニバルの起源を題材にした《Runaway Reaction》を発表。パレードのようなパフォーマンスの他に、彫刻作品やインスタレーションも発表している。代表作には女性の首と胸にペーパーパウダーでファッション・ブランドのロゴを転写する写真シリーズ《Powder Box》がある。

今回は復活と再生をテーマにしたパレードを、会期中に2回実施する。また、パレード制作のために長者町にオープンスタジオを構えたり、県内の高校でワークショップを行ったりと、積極的に観客の参加を歓迎している。オープンスタジオでは、希望の観客は自由にスタジオを見学し、共に作業をすることができる。またこのオープンスタジオは会期中は、パレードの衣装やドロウイングの展示空間となる。

《Runaway Reaction》2008
Procession view at Gwangju Biennale, Gwangju
photo: 太田朗子





ゲッラ・デ・ラ・パス (Guerra de la Paz)

1996年より活動を開始。フロリダ州マイアミを拠点に活動。アライン・ゲッラ（1968年キューバ・ハバナ生まれ）とネラルド・デ・ラ・パス（1955年キューバ・マンタンサス生まれ）の2人によるユニット。ともにアメリカで美術を学ぶ。彼らが拠点とするマイアミのリトル・ハイチは、「ベベ」と呼ばれるハイチ向けに輸出される中古品ビジネス地の近くにある。その取引によって生み出される大量のゴミ処理場行き衣類を2人は主な素材としてきた。工夫して物を再利用することは美術と同じくらいに歴史がある。「衣服が人を作る」ということわざがあるように、中でも使われなくなった衣類は人間のエネルギーとメタファーに満ち、消費や環境問題、個と集団、企業倫理、社会的権力といった世界共通の問題を自ずと浮かび上がらせる。彼らは自らの実践を、思慮深く過激な「考古学」であると見なしている。彼らの体感型のインスタレーションは、才気にあふれ、演劇的で、しかも明快である。しかしその作品の意味は澄んではない。というのも、現代生活の矛盾を彼らが体現していること自体を、作品が包み込んでいるからである。今回は、彼らのホームタウンであるマイアミと同様に古衣料が豊富に存在し、リサイクル業の盛んな岡崎の素材で日本庭園を作り出す。

Concept Drawing for 《Secret Garden》, 2013



ハン・フェン (HAN Feng)

1972年ハルビン（中国）生まれ。上海を拠点に活動。ハルビン師範大学芸術課程で学んだ後、上海大学芸術課程の修士に進む。伝統的な墨絵を学んだハン・フェンは、現在ではその繊細な感性を活かし、油彩画や折り曲げた紙によるインスタレーションを制作している。今回のあいちトリエンナーレでは、水、発電所、そして都市の閉所恐怖症を主題とした絵画と、揺れ動く街の上を浮遊するかのようなインスタレーションを展示する予定である。ハン・フェンは現代生活における心身の状態を鋭敏に感じ取り、作品を通じて、その意味をあらためて私たちに気づかせてくれるだろう。

《The Waves 1》2010
courtesy of the artist



彦坂尚嘉 (ひこさか なおよし / HIKOSAKA Naoyoshi)

1946年東京都生まれ。神奈川を拠点に活動。多摩美術大学のバリケードの中で展覧会を開いた美共闘のアーティスト。このときの作品から展開し、1970年、自宅の八畳間にラテックスを大量に流すフロアイベントを行ったり、ウッドペインティングのシリーズを制作している。また、ラカンを背景にした芸術分析の理論を構築し、ブログを通じて発表するほか、歴史への深い関心から連続シンポジウムのアートスタディーズを企画した。2009年より立教大学大学院の特任教授に就任。近年は『空想皇居美術館』（2010）など、建築界との交流を通じたプロジェクトも手がける。東日本大震災の後、京都に疎開したが、福島県南相馬の仮設住宅地の塔のある集会場では、外壁に「復活」という絵文字のグラフィティを描く。設計段階からアートが組み込まれた仮設住宅地は、ここだけである。そして彦坂は被災者の和歌を集めた『3.11万葉集・復活の塔』（2012）を刊行した。

今回は、このプロジェクトをもとにした大型の作品を発表し、ヒノキ材に被災者の和歌を刻み込む。

彦坂尚嘉+気体分子ギャラリー：福島県南相馬グラフィティ《FUKUSHIMA 復活》2011
（建築設計：東北大学五十嵐太郎研究室+芳賀沼整・はりゅうウッドスタジオ）
photo: 彦坂尚嘉+senkichi



平川祐樹 (ひらかわ ゆうき / HIRAKAWA Youki)

1983年愛知県生まれ。ドイツを拠点に活動。2008年名古屋学芸大学大学院メディア造形学科研究科修士課程修了。映像を中心として、写真やインスタレーション、あるいはそれら複数のメディアを組み合わせた作品を発表している。それらの作品の中で扱われているのは、非個性的な都市における断片化し吊りになった現代の物語や、場所に深く根づく固有の存在といったテーマである。また燃えている蠟燭や凍った葉などを撮影したシンプルな作品においては、経過した時間の痕跡をとどめている。そうした多面的な彼の作品に共通しているのは、静的で硬質なイメージの強度である。あいちトリエンナーレ2010では企画コンペ部門で出品し、名古屋市内を流れる中川運河を撮影した映像作品を発表した。今回は、岡崎のフィールドワークを通じ、その土地の過去の水難の記憶を扱った作品の展示を予定。

《River Bed》2012
© Youki Hirakawa



平田五郎 (ひらた ごろう / HIRATA Goro)

1965年東京都生まれ。茨城県を拠点に活動。1990年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程壁画研究室修了。パラフィンワックス（蝋）によって制作される建築的な構造物で知られる。シンプルでユニタリーな立方体や球体から成るその構造物は、ミニマルな形態の彫刻としてというよりも、その中に入って体験する空間として提示される。その空間の内部は外から透過して入り込んだ光に満たされており、鑑賞者が観想し回帰していくことのできる原型としての「家」のようなものとなっている。また、北海道では凍結した湖面上に雪や氷でできた家を作ったり、アラスカ湾東岸部では石を積み上げた10個の彫刻を制作したりするなどパーソナルな仕事としてフィールドワークを続けている。

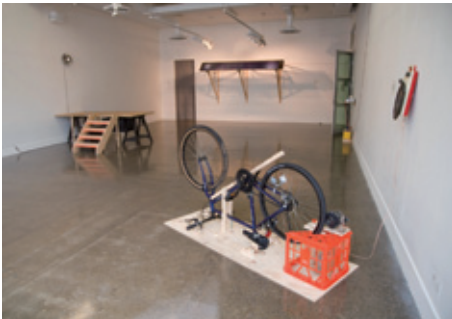
《Mind Space-積み木の家》2000
福岡市美術館での展示風景



トーマス・ヒルシュホルン (Thomas HIRSCHHORN)

11957年ベルン（スイス）生まれ。パリを拠点に活動。2000年マルセル・デュシャン賞、2011年クルト・シュヴィッターズ賞など重要な芸術賞を多数受賞のほか、世界各地で展覧会を開催している。今回の出品作《涙の回復室》(1996)は、大きな災害が起きた後に生じる、なかなか消えない不安感や「生き残った人の罪悪感」、亡くなった人に対する悲哀や追悼の念などの感情を主題としたインスタレーション作品である。日常の雑多な素材を用いて制作することで、芸術作品をありふれた生活経験へと結びつけつつも、人間性への献身が感じられる。

《涙の回復室》1996
courtesy of Galerie Susanna Kulli, Zurich



池田剛介 (いけだ こうすけ / IKEDA Kosuke)

1980年福岡県生まれ。東京を拠点に活動。2003年京都造形芸術大学卒業、2005年東京藝術大学大学院修士課程修了。生態系や水といった自然界で循環するものや、電気や光などのエネルギーの変換を扱う作品を制作してきた。2011年から「東京藝術発電所」というアート・プロジェクトに着手し、これまで東京、大船渡、メルボルン、南相馬各地で関連する一連のプロジェクトを發展させてきた。「発電所」が示唆するとおり、これは自転車や日用品を用いて発電ができる簡易的なデバイスを作り、それを介して自らの運動・エネルギーを電気に変換する作品である。一義的には発電プロジェクトだが、東日本大震災の被災地、エネルギー問題で揺れる都市、自然との共生や環境問題に対する意識の高い地域に、自ら足を運んで地域の人々と共に実践することから、そこでは不可避免的に今日のエネルギー問題や、個人とコミュニティとの関わりを問うことになる。池田の実践は、自明の理やテクノロジーや同質的と思われているコミュニティの概念を再検証し、現代人の営みに必要な思考とエネルギーを自力で創り出すことである。コミュニティのなかの個人、水中の水滴といった個の単位を基点としながら、人、エネルギー、自然がもつ大きな連鎖とサイクルを視覚化させる。

今回は、このプロジェクトを基にした新作を展示する。

《Melbourne Art-Power Plant》2012
メルボルン・RMIT プロジェクトスペースでの展示風景
photo: Andrew Barcham



インヴィジブル・プレイグラウンド (Invisible Playground)

2009年に、アーティスト、ゲーム・デザイナー、ミュージシャンや舞台制作者とともに、「都市そのものをゲームの舞台としよう」と結成されたグループ。ベルリンを拠点に活動。メンバーは、コアメンバーの7名を中心に、プロジェクトごとに変動する。都市空間を舞台に、参加者を募り、人や環境、メディアを含むテクノロジーによるつながりを用いたゲームを通して、都市や社会に対する認識を新たにすることをテーマとする。ゲームの中で、見知らぬ者同士が、インヴィジブル・プレイグラウンドによって設定された「ルール」に沿って、協力し合い、または競い合うことで、日常行為の中では見えないことのなかった、都市と自分（人）との新しい関係性を発見することになる。欧米各地の劇場やアートスペース、フェスティバルに招聘されている。今回は、名古屋と岡崎の街を美術館に見立て、オーディオガイドを使用したゲームを発表する。名古屋と岡崎で調査した、愛知で実際に起きた出来事から着想を得たゲームとなる。観客は4人一組で参加し、美術館のオーディオガイドのように音声指示に従って、ゲームを行う。それぞれのゲームは単体で遊ぶ事も、スタンプラリーのように全てを集めて遊ぶことも可能である。

《Lies in the Sand》2012



伊坂義夫、大坪美穂、岡本信治郎、小堀令子、清水洋子、白井美穂、松本旻、山口啓介、王舒野、PYTHAGORAS³ (覆面作家)

(ISAKA Yoshio, OTSUBO Miho, OKAMOTO Shinjiro, KOBORI Reiko, SHIMIZU Yoko, SHIRAI Mio, MATSUMOTO Akira, YAMAGUCHI Keisuke, WANG Shuye, PYTHAGORAS³)

今回出品される《「地球・爆—Earth Attack」第1番》は15枚組(2.27m×27.27m)で構成。錯で始まるこの合作「地球・爆」は、2003年に10人の画家と10人の評論家加わって構想され、最終的には11番(壁画が1番から10番、床置き作品が11番)で構成される巨大なプロジェクト。2001年に起こったニューヨークでの9.11の事件が制作のきっかけとなって、岡本信治郎が企画提案をし、複数のメンバーが賛同して参加している。互いに議論を交わしながら、不協和音や矛盾をはらみつつ、共同制作として作りあげること特徴としている。2003年に下絵の制作に全員で着手し、全作品の決定稿がそろったのが、2007年9月。それから本絵にとりかかり、まずは第1番が2013年2月に完成された。反戦絵画ではあるが、モノクロームで描かれ、書物のように読み解いていく絵画となっている。

《「地球・爆—Earth Attack」第1番》(部分)2013



石上純也 (いしがみ じゅんや / ISHIGAMI Junya)

1974年神奈川県生まれ。東京を拠点に活動。2000年東京藝術大学大学院美術研究科建築科修士課程修了。妹島和世建築設計事務所勤務を経て、2004年石上純也建築設計事務所設立。2007年の東京都現代美術館での「SPACE FOR YOUR FUTURE」展で金属でできた重さ1トンのポリウムが宙にただよう《四角いふうせん》を展示し注目を集める。2008年第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて個展。2009年「神奈川工科大学KAIT工房」で日本建築学会賞作品賞受賞。2010年第12回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展で金獅子賞を受賞。2010年資生堂ギャラリーおよび豊田市美術館で個展を開催。大胆なアイデアに基づく空間と構造物を作り建築の可能性を拓ける、今、国内外で最も期待され、注目されている建築家である。

今回、展示するリトルガーデンは、丸いテーブルの上にかわいらしい銀器が無数に並ぶ作品。乾燥した小さな花びらが入る容器はどれも大きさとかたちが異なる。それぞれの器を極小の庭と見立て、じっと眺めると、小さな世界に没入する感覚になるだろう。そのとき器は展示室に、花びらはアート作品のように見えるかもしれない。

《little gardens》2007

佐藤辰美蔵

photo: 太田拓実



アルフレッド・ジャー (Alfredo JAAR)

1956年チリ生まれ。ニューヨークを拠点に活動。写真、映像、建築などを通して、社会的な不平等問題に目を向けさせるような作品を制作してきた。なかでも、1990年代の《ルワンダ・プロジェクト》は代表的なもので、1994年のルワンダで起きた集団虐殺のあった現場へ自ら行き、悲劇の実態を取材したうえで制作された。このように、ジャーの作品制作は具体的な出来事や状況や背景を徹底的に分析することから始まる。そのうえで、イメージと空間の背後にある社会的な関係性について問いを投げかける。イメージに内在する言語システム、それらを読むという作業、そして最終的にはそれらの脱構築(ジャーのいう「イメージの政治性」)を、作品を通して顕在化させる。

昨年、彼は津波や原発事故の被害を受けた被災地を回った。そのときに学校を失った子供たちのことを知り、そこで2011年3月11日までに過ごした時間と、その先にある未来を多くの人に思い描いてもらうための新作を制作する。

「黒板プロジェクト」2013

© Alfredo Jaar



ミハイル・カリキス&ウリエル・オルロー (Mikhail KARIKIS and Uriel ORLOW)

カリキスは1975年テッサロニキ(ギリシア)生まれ。ロンドンを拠点に活動。建築を学んだ後、音、映像、写真、パフォーマンスなどを使う横断的な表現を展開している。彼は人間の声について研究しつつ、コミュニティ、職業的なアイデンティティ、人権などのテーマを探求する作品を発表している。オルローは1973年チューリッヒ(スイス)生まれ。ロンドンを拠点に活動。マルチメディアのインストールやサウンドの研究を行い、記憶と歴史の場所としてのランドスケープに興味を持ち、カリキスと協働した。

今回の映像作品《Sounds from Beneath》は、イギリスの政策によって閉鎖された炭坑跡地にて、かつてそこで働いた高齢になった男達が当時聴いていた音(爆発、警報、蒸気、機械の音など)を声で模倣しながら歌う。当事者の声が労働の記憶を鮮やかに甦らせる試みである。

《Sounds from Beneath》2010-2011

courtesy of the artists



片山真理 (かたやま まり / KATAYAMA Mari)

1987年埼玉県生まれ。群馬県で育つ。東京を拠点に活動。片山は、脛骨欠損という、主幹を成す太い骨がない病気を先天的に持って生まれ、9歳の時に両足とも切断している。そうした身体の特徴と、自分自身を取り巻く世界とのかかわりを、10代の頃より、オブジェや写真で表現してきた。それは、少女の頃の義足や小さなハイヒールを身に着けた、私的で内面的な親密さに満ちたセルフポートレート写真であり、実際に彼女が生活し、制作活動もする部屋の姿を、日用品と彼女が作ったオブジェで構成して提示することである。あるいは、彼女自身の手によって丁寧に装飾された両足の義足を提示することや、義足用に特注したハイヒールを着けた彼女自身のパフォーマンスの試みである。「アートアワードトーキョー丸の内2012」のグランプリを受賞。東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。今回は元モデルルームでもあった納屋橋の会場の部屋の再利用して彼女の展示を構成する。

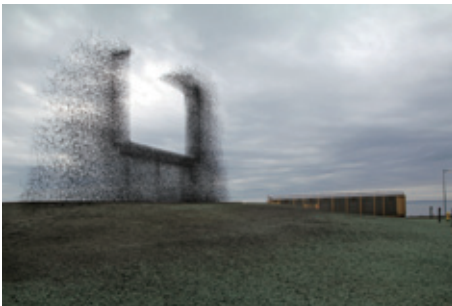
《ハイヒール》2011



國府理 (こくふ おさむ / KOKUFU Osamu)

1970年京都府生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。國府理の作品の最大の魅力は、少年時代に夢みた不思議な発明や心躍る冒険をそのまま形にしてしまうところである。船の帆がついた自動車。パラボラアンテナの中にある小さな移動式の庭。クジラ型ロボット。骨格標本。國府は、これらSF小説に出てきそうな魅力的なメカを、自ら機械を加工して作り出す。けれども彼の作品は、科学技術がもたらす輝かしい未来ばかりを唱えているわけではない。むしろ、科学技術に対する懐疑をも感じさせる。水槽にガソリンエンジンを沈めた《水中エンジン》(2012)は、機械エネルギーの矛盾や暴力性をより直接的に痛感させる。エンジンは排気ガスを辺りにまき散らしつつ機動するが、その動力はどこへも行き着くことはない。核分裂を水で制御する原子炉をも彷彿させる作品である。今回は、ひっくり返った車体の上に草木が生い茂る《虹の高地》シリーズを出展する。この極小の高地は坪庭のような美しさをたたえつつも、文明が減じた後の楽園をも予感させる。

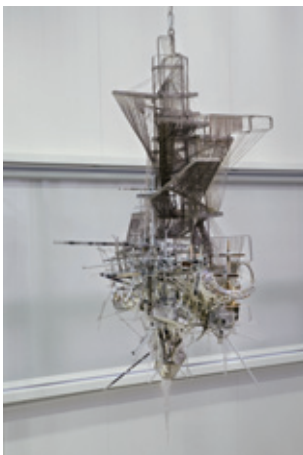
《虹の高地》2008
photo: Tomas Svab



レッド・ペンシル・スタジオ (LEAD PENCIL STUDIO)

1997年結成。アメリカを拠点に活動。アートと建築の境界線上で活動するユニット。空間の知覚を様々な角度から丹念にリサーチし、その対象だけを取り出すことで見慣れたものが見慣れないものに変化するような作品を発表している。その結果、彼らが「反転した建築architecture in reverse」と呼ぶように、建築的な機能を一切持たない形だけが顕在化される。そのため、建築物は純粹に形だけの存在に還元され、人間の知覚との関係性を取り戻すのである。そうした効果は、鉄の棒やテキスタイルのような抽象的な形をつくりやすい素材を組み合わせることによって生み出されていることが多い。《非-記号II》はアメリカとカナダの国境線沿いに現れる巨大なビルボードで、黒い鉄の線がその周辺を覆うように囲い、広告が表示されるはずの中心部は空虚になっている作品である。アメリカにおける建築のローマ賞を2008年に受賞するほか、様々な展覧会への参加や大学での講義など活動の幅を広げている。

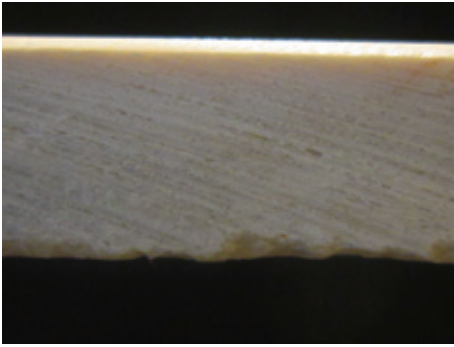
《Non-Sign II》2010
Blaine, WA, United States Federal Government
courtesy of the artists



イ・ブル (LEE Bul)

1964年韓国生まれ。ソウルを拠点に活動。ニューヨーク近代美術館、カルティエ現代美術財団、森美術館などで個展を開催している。奇怪な生物の手足を持つソフトスカルプチャーを着たパフォーマンスや、生魚の腐敗臭を漂わせる過激な展示で注目を集め、軍事政権から民主化へと急激な変化を遂げた韓国社会における抑圧と権力、あるいは人々の欲望をもとにした作品を発表してきた。また、機械と人間が融合したようなサイボーグ、あるいは触覚などが異常に発達したモンスターなどの彫刻によって身体的な造型において異彩を放つアーティストでもある。近年はブルーノ・タウトやウラジミール・タトリンらが参照され、光り輝きながらも崩壊していきそうな都市の模型の作品を数多く制作している。政治や資本が作り出す現実と理想の間で揺れ動き、誰もが自身の実像を捉えることが難しい現代社会。彼女の作品は、なかなか到達できない理想を追い求める私たちが鏡のように映し出しているようにみえる。

《星の建築 16》2008
Private collection, Seoul.
courtesy of Studio Lee Bul.



ニッキ・ルナ (Nikki LUNA)

1977年フィリピン生まれ。マニラを拠点に活動。フィリピン国内外で活動するアーティストであると同時に社会運動家でもあるルナは、2008年に非営利団体startARTプロジェクトを立ち上げ、性的虐待や紛争等で傷ついた女性や子ども達に対しアートを通じた支援を行っている。彼女の作品は、何らかの社会状況をもとに生み出されているが、表現は決して声高で説教くさいものではなく、繊細で詩的な印象すら覚えるだろう。社会とアートをごく自然に繋ぎ合わせてみせ、私たちの感性を刺激しつつ、抑圧に苦しむ人々について問題提起を行っている。

今回発表する作品は名古屋のフィリピン人コミュニティに着想を得て作られた。大理石で作られた葉脈のようなものが天井から吊るされているが、これは流れ行く人々を示している。宙づりにされたこの大理石は、このコミュニティが故国から切り離され漂流の運命にあることを思い起こさせる。また、この美しい大理石はコンクリート板の上のひび割れと照応している。あたかも、文化の源が、それとは全く異質な環境の中に見いだされるかのようである。

《コンクリートから流れる血》2013
courtesy of the artist



バシール・マクール (Bashir MAKHOULI)

1963年ガリラヤ生まれ。イギリスを拠点に活動。パレスチナ人アーティストで、イギリスに活動拠点を移してから20年以上になる。さまざまな素材でモダニズムとポストモダニズム美学を探究してきた。同時に、これらは、彼の出自であるパレスチナ人であることの、陰影を持つ政治的な批評を孕んだものとなっている。作品は美的な誘惑を特徴とするモチーフの繰り返しを用いることが多く、鑑賞者は作品の中に引き込まれていくと同時に、その美しいパターン性を超えた、複雑な何かと関わりあっていると気づく。実は、経済と国家、戦争と虐待が巧みに織り込まれている。

今回のインスタレーション《Enter Ghost, Exit Ghost》は、段ボールで模したアラブの町並みあるいは難民キャンプへと続く100mにおよぶ通路からなる迷路である。迷路の壁には、東エルサレムにあるヘブロンとパレスチナの難民キャンプを写したレンティキュラー・フォトグラフが掛かっている。レンズ状のレンティキュラー技術によって、観者が写真を横切るにつれそのイメージを変える。つまり迷路の旅によって仮想と現実の世界が交錯する「幽霊のような空間」が創られる—それは、都市戦争下で訓練のために造られる模擬都市の増大するグローバルな現象へのアーティストの考察、都市開発から着想を得た監視とCAD（コンピュータ設計）による「パラレル・ワールド」なのだ。

《Enter Ghost, Exit Ghost》2012
courtesy of the artist



アンジェリカ・メシティ (Angelica MESITI)

1976年シドニー（オーストラリア）生まれ。シドニーを拠点に活動。ニュー・サウス・ウェールズ大学で美術を学んだメシティは、ビデオ、パフォーマンス、インスタレーションなどの手法にサイト・スペシフィックな行為や、現実の出来事のフィクション化あるいは記録といったアプローチを交えた作品を作りだす。

今回は2012年メルボルンの現代美術センターACCAの新進作家紹介展「NEW12」で発表し、高い評価を受けた《Citizens Band》(2012)を出品する。空間に正方形に配された4つの画面それぞれに、移民のパフォーマーが、自らが暮らす都市の一角で音楽を奏でる様子が鮮やかに映し出される。カメルーン出身のパークァシオニストは、パリの室内プールで水面を舞台に手で見事なドラミングをみせる。アルジェリアからパリに移民してきたストリート・シンガーは、メトロで壊れかけたカシオのキーボードを肩にのせ哀歌を歌う。モンゴルがルーツのホーメイ歌手はシドニーの街角で胡弓を奏でながら独特の声を響かせ、スーダン出身でブリスベンに暮らすタクシー運転手は、運転席で哀愁漂う口笛で曲を奏でる。音楽と共に生きる喜びと移民として暮らす複雑な現実の気配を漂わせながら、4名の圧倒的なパフォーマンスは、文化間の移動によって失われゆく旋律と歴史という悲しい現実を示唆しつつ、観る者を魅了する。

《シティズンズ・バンド》2012
courtesy of the artist and Anna Schwartz Gallery, Sydney



アーノウト・ミック (Aernout MIK)

1962年オランダ生まれ。アムステルダムを拠点に活動。ある同じ動作や出来事が繰り返され、まっすぐ進む時間の流れから宙吊りになったような映像作品をつくる。画面の中には矛盾する出来事が同時に起きていたり、物語が動き出しそうなのに留まり続けるような群衆の画像が映し出されることが多い。言葉の力を借りなくても観客が眼にする画像が、同時代の戦争やグローバリゼーション、市場、民族主義などといった政治や社会の問題と結びついていると感じさせるのもミックの作品の特徴である。多くの場合は無音で、まるで空間に丁寧に配置された彫刻のように複数のスクリーンを配置させる。そのことによって、鑑賞者に画面と自分の身体の関係性を強く意識するように仕向けるため、映像、パフォーマンス、彫刻、建築を横断するような試みとも考えられる。

今回は東日本大震災後の避難所での出来事を題材に、人間が抱える矛盾や複雑な感情を独特の手法で描き出す新作を発表する。

《段ボールの壁》2013
still from video installation
courtesy of carliergebauer, Berlin



宮本佳明 (みやもと かつひろ / MIYAMOTO Katsuhiko)

1961年兵庫県生まれ。兵庫を拠点に活動。阪神淡路大震災の後、全壊判定を受けた実家を改造・補強を行い、「ゼンカイハウス」として甦らせたことで注目される。磯崎新、宮本隆司らと参加した1996年のヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展の日本館では、被災地の瓦礫を持ち込み、「亀裂」をテーマにした展示によって金獅子賞を受賞した。著作『環境ノイズを読み、風景をつくる。』では、建築を単体としてとらえず、地形、歴史的な要素、インフラなどを含む総合的な環境から捉える視点を示している。こうしたモノの見方は本格的な山登りの経験からも培われたものだ。澄心寺の庫裏コンペでは、空間の使い方が変わっても、コンクリートの大屋根が100年残ることをコンセプトに掲げ、設計者に選ばれ、プロジェクトを実現させた。東日本大震災後はいち早く被災地に入り、復興支援活動を始め、建屋に和風の屋根を載せる「福島第一原発神社」も発表した。今回は愛知芸術文化センターの壁や床に1/1スケールで原発の図面を記し、建屋を転送したかのようなプロジェクトを行う。映像でしか知らない福島原発の大きさを身体で感知させる試みである。

〈福島第一さかえ原発〉2013

© 宮本佳明



Nadegata Instant Party (中崎透 + 山城大督 + 野田智子) Nadegata Instant Party (NAKAZAKI Tohru + YAMASHIRO Daisuke + NODA Tomoko)

中崎透 (1976年茨城県生まれ)、山城大督 (1983年大阪府生まれ)、野田智子 (1983年岐阜県生まれ) の3人によるアーティスト・ユニット。2006年より活動を開始。東京を拠点に活動。地域コミュニティにコミットし、その場所や状況において最適な「口実」を立ち上げる。口実化した目的を達成するために、多くの参加者を巻き込みながら、ひとつの出来事を「現実」としてつくりあげていく。「口実」によって「現実」が変わっていくその過程をストーリー化し、ドキュメントや演劇的手法、インスタレーションなどを組み合わせながら作品を展開している。代表作に2010年青森公立大学国際芸術センター青森での100名を超える市民スタッフと共に地元メディアをも巻き込んだ24時間だけのインターネットテレビ局《24 OUR TELEVISION》や、2011年パース (オーストラリア) Perth Institute of Contemporary Artsでの《Yellow Cake Street》では、架空のオーストラリア家庭料理「イエローケーキ」のレシピを地元シェフや市民と考案し、期間限定のケーキ店の開業を実現させた。

今回は、電力開閉所跡地を舞台に、多くのサポーターを巻き込みながら手づくりの“特撮スタジオ”を作り上げ、回遊型のインスタレーションと映像作品を発表する。

「STUDIO TUBE」創設のためのブランドローイング 2013

courtesy of the artist



奈良美智 (なら よしとも / NARA Yoshitomo)

1959年青森県生まれ。東京を拠点に活動。1985年愛知県立芸術大学美術学部を卒業後、1987年同大学院修了。1988年ドイツ国立デュッセルドルフ芸術アカデミーに入学。1995年名古屋芸術奨励賞受賞、1998年カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) で3ヶ月間客員教授を勤める。2005年より栃木県在住。2006年度武蔵野美術大学客員教授。2013年芸術選奨文部科学大臣賞 (美術部門) 受賞。絵画、ドローイング、彫刻そして大規模なインスタレーションなど多様な作品を通じて広く世界中の人々を魅了し、ニューヨーク近代美術館に作品が所蔵される日本の現代美術を代表するアーティストの一人。美術や他分野の作家たちとのコラボレーション、地方でのボランティア主導による大規模展覧会、ロックフェスなどでのDJ、など、新しい試みを続けるアーティストである。

今回も、『THE WE-LOWS / ザ・ウィロウズ』のグループ名で、奈良個人の世界観を提示するのではなく、愛知在住の昔からの友人やその周辺の人々と共に作品制作を行う。名古屋の長者町の空きビルにギャラリー空間を廃材をリサイクルして作り、そこで奈良自身が企画する展覧会を行うほか、カフェも併設する。

「WE-LOW Gallery 制作現場6月23日」2013

名和晃平 (なわ こうへい / NAWA Kohei)

1975年大阪府生まれ。京都を拠点に活動。1998年京都市立芸術大学美術学部美術科彫刻専攻を卒業。2000年同大学院美術研究科彫刻専攻修了。2003年同大学院美術研究科博士課程彫刻専攻修了。2003年キリンアートアワード2003奨励賞受賞。2010年第14回アジア・アート・ビエンナーレ・バンガラデシュ2010最優秀賞受賞。2011年東京都現代美術館で個展「名和晃平—シンセシス」開催。ビーズやプリズム、発泡ポリウレタン、シリコンオイルなどの現代的な素材を用いて、造形の新たな可能性を切り拓く注目の若手アーティスト。とくに彼は画素のピクセル (Pixel) と細胞のセル (Cell) を合体させた造語「PixCell」、すなわち「映像の細胞」というべき概念を提唱し、インターネットで購入した動物剥製などの表面を大小のガラス球で覆いつくし、情報化時代におけるモノの存在やそれに対するわれわれの知覚を鋭く問いかける。また最近では京都にて、建築家、写真家、デザイナーらと、横断的な創造活動を行うプラットフォーム、SANDWICHを展開している。

今回、納屋橋の三階では、暗い空間においてさまざまな泡が水面からたえず隆起しながら、かたちを変え続けるランドスケープをつくりだす。それは世界創造の風景のようでもあり、無数の粒子に覆われる名和の彫刻の進化形に見えるだろう。

〈PixCell- (White)〉2003

courtesy of Gallery Nomart, Osaka

photo: Haruo Kaneko





新美泰史 (にいみ たいし / NIIMI Taishi)

1975年愛知県生まれ。愛知県を拠点に活動。2005年以降、名古屋で発表活動をしてきたが、近年、愛知県外でも、発表することが多くなってきた。10メートルのケント紙に水性ペンで細かく隙間なく描き続けるなど、通常のアーティストではやらないようなスタイルで作品を制作する。水性ペンによる描線の一つ一つは決して機械的なプロセスで作られたものではなく、筆圧を一定化して作られたものである。これは「ウラノス」と彼が親しみを込めて呼ぶ、ギリシア神話に登場する神の姿である。作品タイトルは「犬」でも同じ姿が繰り返し登場する。版画にも見えてしまう、描線の太い作品は、小さなドローイングを拡大しながらも、機械による拡大コピーによって起こる細部をカッターで切り込みながら、「型紙」を経由してアクリル絵の具で塗り込んだものである。

今回はこの「型紙」による作品のシリーズを、2011年の東日本震災以後に制作された作品も含めて展示する。

〈犬シリーズ9 (犬)〉2010

courtesy of Gallery Ham, Nagoya and Yumiko Chiba Associates, Tokyo



西岳拓貴 (にしただけ ひろき / NISHITAKE Hiroki)

1984年長崎県生まれ。東京を拠点に活動。2008年愛知県立芸術大学卒業後、2010年東京藝術大学大学院修士課程修了。東京藝大在学中、フランス・ナントビエンナーレESTUAIREの河口プロジェクトに参加。ナントからサン・ナゼールまでの道約50キロの区間で、ラテックス（液体のゴム）を塗って巻き取っていくプロジェクト「ROAD OF SEX」を実施した。2012年の愛知県美術館のAPMoA Project, ARCHIにおいて発表した「ROAD OF SEX Tokyo >> Aichi」では、東京から愛知までの道のりでそのプロジェクトを行った。彼はそこで試みているのはいわば身体を用いた大地とのやり取りであり、場所の記憶を一つの塊へと巻き取っていく行為である。

〈ROAD OF SEX Tokyo >> Aichi〉2012



丹羽良徳 (にわ よしのり / NIWA Yoshinori)

1982年愛知県生まれ。東京を拠点に活動。多摩美術大学映像演劇学科卒業。不可能性と交換を軸とした行為や企てを路上などの公共空間で試みることで、社会や歴史へ介入する作品を制作。東ベルリンの水たまりを西ベルリンに口で移しかえる《水たまりAを水たまりBに移しかえる》(2004)など肉体を酷使した不毛な交換行為に始まり、都市の抗議活動を無関係な観光地まで延長させた《首相官邸前から富士山頂上までデモ行進する》(2012)など、自身の状況を転置することで眼に見える現実を解体し、「公共性」という幻想のシステムの彼岸を露出させる新たな物語を作り出す。

今回は岡崎と名古屋の二都市で展示する。震災直後の反原発デモをひとり逆走する《デモ行進を逆走する》(2011)、共産主義の歴史への興味から社会主義者を胴上げしようとする現地の共産党と交渉する《ルーマニアで社会主義者を胴上げする》(2010) やソビエトが解体されたロシアの一般家庭を訪問してレーニンを捜し続ける《モスクワのアパートメントでウラジーミル・レーニンを捜す》(2012) など、移行行く国家や歴史の一端を往来するプロジェクトを名古屋で取材した新作を加えて展示する。

〈デモ行進を逆走する〉2011

© Yoshinori Niwa

courtesy of Ai Kowada Gallery, Tokyo



クリスティナ・ノルマン (Kristina NORMAN)

1979年タリン（エストニア）生まれ。タリンを拠点に活動。ノルマンはエストニア美術アカデミーで学び、現在、教鞭をとっている。一つの場所に関わる記憶を題材にして、映像を中心として複数のメディアを含むインスタレーションの形で伝える。今回の出品作品《戦後》は、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ(2009)において、エストニアの代表として発表したノルマンの代表的プロジェクトである。1991年にソビエト連邦から独立したエストニア政府は、タリンの中心地区に1947年に設置されたパブリック彫刻を、2007年に郊外に移設する。このことにロシア人コミュニティが異議申立てをする。この作品は、ありふれたパブリック彫刻の成り行きを、ビデオ、彫刻と写真を用いて、過去と現在を多面的に示すもので、政治に翻弄されるその彫刻と場所を巡るストーリー展開で、コミュニティにおけるパブリック彫刻とパブリックなものを持つその象徴的な意味が明らかになる。

〈戦後〉2009

Installation view at The Baltic Triennial of International Art, Vilnius

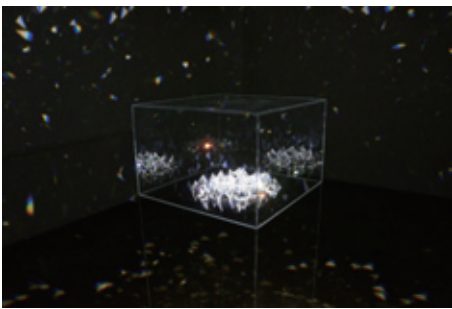


岡本信治郎 (おかもと しんじろう / OKAMOTO Shinjiro)

1933年東京都生まれ。東京を拠点に活動。独学で美術を学び、1950年代半ばからアンデパンダン展に出品。それまで主流であった絵画表現を否定するアヴァンギャルド絵画の旗手として登場した。筆触のない乾いた線による線描と、シンプルで鮮やかな彩色の組み合わせが特徴である。彼の画業の中に繰り返し登場する人物のユニークなキャラクター作りも含めて、社会や文化に対する辛辣な批評を織り込んだ絵画をエネルギーに作り続けてきた。2011年に渋谷区立松涛美術館で開催された個展「空襲25時」は戦争を主題としていた。

今回出品される大作《ころがるさくら・東京大空襲》は、2001年にニューヨークで起こったテロ攻撃9.11を契機に蘇った、少年時の自らが観た1945年の東京大空襲を描いたもの。同じモチーフが執拗に繰り返されるその画面上には、同時に歴史上のさまざまなテキストや事件名が描き込まれている。繰り返し描かれたモチーフとその細部に幻惑される体験と、読書体験のように文字を読みこんでいく知性的な体験とが共存する。

《ころがるさくら・東京大空襲》2006
2011年、渋谷区立松涛美術館「空襲 25時」展での展示風景
courtesy of the Shoto Museum of Art, Tokyo
photo: 椎木静寧



オノ・ヨーコ (ONO Yoko)

1933年東京都生まれ。ニューヨークを拠点に活動。哲学を研究後、20歳のときに渡米。1966年に活動の拠点をロンドンに移す。同年11月に個展を開催した際、その会場でビートルズのメンバーであったジョン・レノンと出会う。レノンと共同での『ベッド・イン』『戦争は終わった』（いずれも1969年）のイベントの開催後も、社会に対するメッセージ性の強い先鋭的なコンセプチュアルアーティストとして、そして音楽家、平和運動家として高い評価を受けている。2009年6月にヴェネツィア・ビエンナーレで生涯業績部門の金獅子賞を受賞。

今回は5点の作品を出展する。誰もが自身の愛や願いを表現することができる《マイ・マミー・イズ・ビューティフル》(2004/2013)と《ウィッシュ・ツリー》(1996/2013)。光に満ちた空間を生み出す《光の家の部分》(1966-2012)。「無意味(ブルー・スカイ)な物思い」を「天国」へと変える《スカイTV》(1966/2013)。祈りのように多くの場所で見られる《生きる喜び》(2013)というフレーズ。これらの芸術作品はアーティストの価値観を短くまとめたようなものである。彼女は、今回のために《七幸八宝》という自己表明的な文章を加え、彼女自身の人生がいかに精神の有り様を映し出し、精神の力によって変化していったのかを示している。

《光の家の部分》1966/2012
courtesy of the artist



打開連合設計事務所 (Open United Studio)

2001年設立。台南を拠点に活動。1972年生まれ劉國滄が率いる打開連合設計事務所 (Open United Studio) は2006年、ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展に作家として参加し、2011年のヴェネツィア・ビエンナーレでは台湾パビリオンの展示デザインを担当した。代表作の《Blue Print》は、台南の道路拡幅によって削られた築100年の建物のリノベーションである。切断されむき出しになった壁に室内の断面パースが描かれ、さらに梁や家具が路上に飛びだし、失われた都市の記憶を喚起する。同シリーズの作品は、ベルリン、深圳・香港都市 / 建築ビエンナーレ、台中の国立美術館でも発表された。今回は同じ手法によって、駅と直結する伏見地下街を青く塗り、白い線によって絵を描き、現実の空間と異空間が重なりあう。階段のモチーフは、ここが誕生した昭和時代と現代、そして未来へとつなぐ意味をもつ。また長者町の繊維街の記憶や、同時代の台湾のイメージにも接続している。五ヶ所の地上出入口も青く塗られ、夜に美しく光る。

《長者町ブループリント》2013
photo: 怡士鉄夫

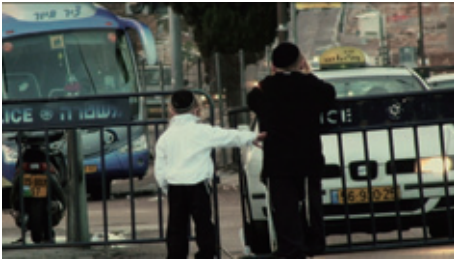


コーネリア・パーカー (Cornelia PARKER)

1956年イギリス生まれ。ロンドンを拠点に活動。彼女の作品は、視覚と言葉による暗示の組み合わせによって、文化的な隠喩や個人的な連想を誘発する。何の変哲もない日常のものが、何か説得力のある驚くべきものへと変容する。2005年テキサスのフォートワース近代美術館、サンフランシスコのイェルバ・ブエナ芸術センター、2007年バーミンガムのIKON、2008年ベルーのリマ美術館、2010年バルティック・センターなど世界中で多くの個展を開催。

今回の作品名《無限カン》は音楽用語であり、あるフレーズが永久に繰り返されることを意味する。このインスタレーションは本来、循環形式、つまり終わりのない空間を想定されて作られた。平たくつぶした楽器を天井から円環状にぶら下げて展示し、中心から光をあてることで、それぞれの楽器の影が壁に投影される。楽器の音色は聞こえず、鑑賞者の注意は音の代わりに影へと向けられる。鑑賞者は聴覚から視覚へと意識を集中させ、一層、沈黙が際立つことだろう。この沈黙こそが、追悼には欠かせないものなのである。

《無限カン》2004
Collection of Contemporary Art Fundación "la Caixa".
Copyright of the image: "la Caixa" Foundation Archives
Copyright of the work: the Artist



ニラ・ペレグ (Nira PEREG)

1969年イスラエル生まれ。テルアビブを拠点に活動。1989年から1993年までニューヨークのクーバー・ユニオンで学び、2000年にエルサレムのベツァレル美術デザイン学院で美術修士号を取得。主な個展に2012年クンストハレ・デュッセルドルフ、2011年ハーシュホーン美術館、2010年テルアビブ美術館 (Nathan Gottesdiener Foundation Israeli Art Prize受賞) 他、グループ展多数。ニラ・ペレグは、文化、宗教、それらに伴う暗黙の社会的慣習や、普段気に留めない人々の行動パターンが、その社会構造に深く裏打ちされていることをビデオ・インスタレーションや写真作品によって表出する。ペレグのアプローチは観察とドキュメンタリーを基調としているものの、日常のなかの他者とその行為を見つめ直し、そこに綿密な音響効果を施すことによって、何気ない風景はどこか劇感性を帯びる。

今回は、ビデオ・インスタレーション《Sabbath》(2008)と、そのストーリーボードとなる写真14点からなる《Location 8》を展示。彼女は社会的規範や権力構造や習慣があらゆる個人の日常生活を規定していることを提示し、特に《Sabbath》では、コミュニティといった同質性を保持することが他者に対して排他的に働きかねないことを、見る者に問いかける。

《安息日》2008
courtesy of the artist and Braverman Gallery, Tel Aviv



ダン・ペルジョヴスキ (Dan PERJOVSCHI)

1961年ルーマニア生まれ。ブカレストを拠点に活動。2004年ジョージ・マチューナス賞受賞。主な個展に1999年ヴェネツィア・ビエンナーレのルーマニア館代表 (subRealと同時展示)、2006年ロンドンのテート・モダン、2007年ニューヨーク近代美術館を含む他、2005年第9回イスタンブール、2007年第52回ヴェネツィア、2008年第16回シドニー、2009年第10回リヨンなど多数のビエンナーレへ参加。日々マスメディアを賑わす世界情勢のニュースを素材とした、大規模なウォール・ドローイングで国際的に知られる。

今回、愛知芸術文化センター11階の77mに及ぶ展望回廊の窓ガラスに、白いペンで直接描かれた数々のドローイングは、ルーマニア革命を経験したアーティストの批評精神とユーモア、シニカルな視点にあふれた日本と愛知の空中都市絵巻さながらである。世界中で絶えない政治紛争、経済格差、共産主義と資本主義の駆引き、グローバリズム、アートの制度にまつわる政治と権力といった諸問題の根源に誰もが関与していることを、説明不要の視覚言語で表出する。

《ザ・トップ・ドローイング》2013
photo: 怡土鉄夫



ウィット・ピムカンチャナポン (Wit PIMKANCHANAPONG)

1976年タイ生まれ。バンコクを拠点に活動。1992年バンコク、チュラロンコン大学建築学部卒業。1994年イギリス、メイドストーンのケント・インスティテュート・オブ・アート&デザイン、ヴィジュアル・コミュニケーションで修士号取得。2002年に日本人建築家、遠藤治郎と共に、音楽、デザイン、建築領域を融合したソイ・ミュージックならびにソイ・プロジェクトを設立。日本では2004年国際交流基金主催「Have we met?」展への出品以降、2005年横浜トリエンナーレ (ソイ・プロジェクト) や2008年横浜黄金町バザールなどへの参加でも知られる。

今回は、ビル跡地のコの字型空間を利用したコインパーキングの上空に、コンピュータ・プログラムによって自在に浮遊するオブジェを設置。長者町の繊維卸売業の盛衰と、新しい技術やビジネスの興隆は、テキスタイル産業が盛んな祖国タイの状況ともクロスオーバーする。新たな経済活動の場となった駐車場の上空は、大気や鳥、巣を張るクモ、それを見る私たちの視線だけが占有できるスペースでもある。ピムカンチャナポンの作品によって、普段は気にすることのない隙間の存在、長者町の歴史、経済活動の変遷が現れ出る。

《隙間》のためのスタディ・ドローイング 2013
courtesy of the artist
Artist: Wit Pimkanchanpong
Electrical Engineer: Piyamate Wasuntapichaikul
Software Engineer: Phumin Phuangjai Sri
Teerath Ariyachartphadungkit
Mechanical Designer: Thanat Srisukson



ニコラス・プロヴォスト (Nicolas PROVOST)

1969年ロンズ (ベルギー) 生まれ。ブリュッセルを拠点に活動。1994年ベルギーのセント王立美術アカデミー卒業。実験映画の文脈に連なる短編や、中・長編の劇映画、映像インスタレーション作品まで、多様なスタイルの作品を制作し、国際的な映画祭から美術展まで、様々な機会を通じて発表している。その作品は、映画を成立させている文法に着目して、その構造を露わにするもので、観る者に映像とは何かを意識させ、再考を促す、知的なアプローチに基づいている。近年では《プロット・ポイント》(2007)など、過去の映画から引用した映像を、本来の作品とは異なる文脈で再構築するファンド・フッテージと呼ばれる手法を摸して、自らハリウッド映画風のショットを撮影、編集した、手の込んだパロディ的ニュアンスの作品も発表。日本ではイメージフォーラム・フェスティバル2007で2作品が紹介された後、あいちトリエンナーレ2010映像プログラムで11作品をまとめた形で上映している。

今回は、前述の《プロット・ポイント》、《スターダスト》(2010)とともに、東京でも撮影された最近作である《東京ジャイアンツ》(2012)を加え、三部作 (トリロジー) をインスタレーションとして上映する。

《東京ジャイアンツ》2012
courtesy of Tim Van Laere Gallery, Antwerp



ワリッド・ラード (Walid RAAD)

1967年レバノン生まれ。ニューヨークを拠点に活動。主にビデオ作品、写真、文章を制作し、レバノンの現代歴史、特に1975年から1991年のレバノンの内戦を主題とした作品を発表してきた。ラードの作品は、レバノン内戦中の集団的トラウマや意識を表象するものとして、そして身体的・心理的暴力や不条理を内在する記録としても機能する。1999年から2004年までは、アトラス・グループという架空の財団を創立し、レバノンの現代歴史を研究し記録していくプロジェクトを立ち上げる。内戦中執筆されたもの、内戦後に見つかったもの、そして新しく制作した記録媒体を集積させたアーカイブの形式を使い展示する活動をおこなった。複雑な出来事の本質を正確に知ることの可能性と不可能性の両面を突きつけるような作品を作り続けている。

《Untitled (1982-2007)》Beirut/New York, 2008
 © Walid Raad
 courtesy of Paula Cooper Gallery, New York



フィリップ・ラメット (Philippe RAMETTE)

1961年イオンヌ地方のオクセール (フランス) 生まれ。パリを拠点に活動。ユーモラスでアイロニカルな場面を示すドローイングを数多く作るほか、荒唐無稽とも言えるアイディアドローイングを作り、そのユニークなアイディアを実現する、身体を拡張する道具を作り、それを身体と組み合わせることによって、彼自身が驚くべきパフォーマンスを行い、その行為が写真として記録される。自然や建物と対決するような、これらの反自然的で身体的なパフォーマンスを、現代の鑑賞者はコンピュータグラフィックスではないか、とつい考えてしまうが、そうではない。これらの写真はユーモアを含みつつも、ヒロイックなまでに人間の更なる可能性を暗示している。

《Contemplation irrationnelle (Irrational Contemplation)》2003
 © Philippe Ramette
 courtesy of Galerie Xippas, Paris
 photo: Marc Damage



リアス・アーク美術館 (Rias Ark Museum of Art)

1994年にオープンした宮城県気仙沼の美術館。漁業や津波など、地域の歴史文化を紹介するほか、東北のアーティストの展覧会を開催してきた。東日本大震災のときは、丘の上にあり、津波の被害は免れたが、学芸員たちが被災したほか、美術館が救援物資の保管場に使われたり、現場で被災の記録をとる特別業務などを遂行し、1年4ヶ月の閉館を余儀なくされた。リアス・アーク美術館は地方の文化施設として、震災後がまさに歴史の瞬間となり、未来に対して記憶を伝えていく役割を背負っている。開館以来ここで勤務し三陸の津波文化史を研究している山内宏泰が中心になって、学芸員が震災直後から撮影した膨大な写真資料、破壊された街で収集した被災物、ときには方言も使う長文のキャプションによる、新しい常設展示を開始した。

今回は、その一部が紹介される。これはいかに災害の記憶を残すのかを問いかけるだろう。

《東日本大震災の記録と津波の災害史》
 撮影場所: リアス・アーク美術館常設展示室
 courtesy of Rias Ark Museum of Art
 photo: 山内宏泰



リゴ23 (Rigo 23)

1966年ポルトガル領マデイラ島生まれ。サンフランシスコを拠点に活動。本名リカルド・ゴウヴェイア。活動は移動型で、世界各地のコミュニティの生活空間に深く入り込むことから作品制作が始まり、社会平等の問題に取り組む。彼の作品はまさに「その時」のもので、協働する人々との関係から生まれるが、歴史を否定しない。それはコミュニティの記憶を呼び起こす誇りの部分であり、不平不満の部分でもあるから。さらに地理を無視しない。それは世界各地で離れ離れにはなっているものの、それぞれの場所における社会的不平等が同一パターンを再構成するからである。そして、場所の直接的なコンテキストも無視しない。公共の空間は、常に政治的に決定づけられるという認識のもとに、作品がその空間を新たに方向付け、更新することを目指す。

今回は、1952年に名古屋で撮影された、梯子のぼって作業に励む電気工事人の写し出された写真を元に、長者町の旧玉屋ビルの壁面3面に3種類の壁画を描く。空高くのびる梯子の絵から、戦後の都市で再構築されたインフラが現在の環境を支えてきた事実を示すと同時に、過去の記憶が現在から未来へと継承していく姿を描き出す。

《Looking at 2013 From 1952 Nagoya》2013
 photo: 怡土鉄夫



アリエル・シュレジンガー (Ariel SCHLESINGER)

1980年エルサレム(イスラエル)生まれ。ベルリンを拠点に活動。1999年から2003年まで、エルサレムのベツァレル美術デザイン学院で学ぶ。イスラエルやドイツの国外でも、個展を開催、グループ展にも数多く参加している。ガスボンベ自体のガスが点火されてその胴体部分を焼き続けるように見える作品などで、今にも目の前で爆発するのではないか、というカタルシスの危険な状態を示すことで、鑑賞者に心理的な緊張を強いる。しかし、「そんなはずはない」という、かりそめのカタルシスという二律背反的な心理状態へも導く。数枚の紙がテーブル上で立ち上がってダンスをしているようなユーモラスでメカニカルな作品も作る。いずれも、不穏さを強く感じさせるメカニズムと、そこで用いられる具体的な動きと素材の組み合わせが、緊張感を作り出し、同時にその緊張からのカタルシスをユーモラスに示す。こうした彼の作品群に、彼を感じる世界の政治状況のメタファーを見て取るのも不思議ではない。今回は、テルアヴィヴで発表されたシリーズを岡崎で発表する予定。街中に存在する割れた窓ガラスの写真とそのガラスとを組み合わせて見せるものと、陶器の表と裏をひっくりかえしたものを床に並べるもの。破壊とその修復の試みが示される。

《untitled (bicycle piece)》2009



キャスパー・アストラップ・シュレーダー + BIG (Kaspar Astrup SCHRÖDER + BIG)

シュレーダーは1979年デンマーク生まれ。ビジュアル・アーティスト/デザイナーとして、2004年に自身の会社Kasparを設立。コペンハーゲンを拠点に活動し、映画祭で受賞多数。映像作品の《MY PLAYGROUND》では、周囲の都市環境を利用しながら、走る、登る、跳ぶなどのダイナミックな動作を行うバルクールをテーマにしている。シュレーダーはバルクールを行うTeam JiYoに興味をもち、彼らをデンマークの建築集団、BIGの代表であるビャルケ・インゲルスに紹介し、BIGの作品を舞台に映像制作を行ったのが、MY PLAYGROUNDの始まりである。インゲルスは、レム・コールハースの事務所OMAの勤務を経て、2006年にBIGを設立。彼らは、代表作である上海万博のデンマーク館や複合施設「8 House」では自転車の移動も前提とした動線を組み込み、歩行とは違うスピードでの空間体験を生みだしている。通常とは異なる身体の動きによって、空間の隠れた可能性を発見する行為は、バルクールと共通するだろう。

《MY PLAYGROUND》2009
courtesy of Kaspar Astrup Schröder



ソ・ミンジョン (SEO Min-jeong)

1972年釜山(韓国)生まれ。ベルリンを拠点に活動。ソウルの弘益大学と東京の多摩美術大学大学院で版画を学んだ後、2003年から2008年までドイツのシュトゥットガルト州立アカデミーで美術を学ぶ。複数の文化を横断しながら、主題を作品のなかに集約するミクストメディアによるインスタレーションを発表している。物語性のある建物、歴史的な事件現場、社会構造のために疎外された地域などに関心を寄せるソ・ミンジョンは、これまでシリーズ作品「Sum in a Point of Time」(ある時点の総体)で、ドイツの美術館の展示空間や韓国の売春宿といった実在する建築物をモチーフにしてきた。発泡スチロールで約3/4のサイズに緻密に再現された模型をいったん壊し、それを会場内で一時的に解体された瞬間のように再度組み立て直し、展示する。いつか何らかの理由で失われてしまうかもしれない建物や人々の歴史と記憶の脆さを実際に体感できる作品をつくり出すことで、建物とそこに携わる人々がもつ「過去」、本来は留めることができない「瞬間」、私たちが生きる「現在」といった異なる時点が重なり合う場を創出する。今回は、名古屋市市政資料館の地下留置所をモチーフにした新作を展示する。

《ある時点の総体》2010
courtesy of the artist



志賀理江子(しが りえこ / SHIGA Lieko)

1980年愛知県生まれ。宮城県を拠点に活動。1999年に渡英。2004年ロンドン芸術大学チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン卒業。国内外でレジデンスや展覧会多数。被写体と土地の内にある潜在的なイメージを、闇のなかからえぐり出すような力強い構写真の技術と、その闇のなかで発光するような独特のイメージで注目を集める。2007年度文化庁在外派遣研修生としてロンドンに一年間滞在。写真集『Lilly』『CANARY』(共に2007)で2008年木村伊兵衛写真賞受賞。2009年にはニューヨーク国際写真センター主催「Infinity Award / Young Photographer」受賞。帰国後、再び東北に戻った志賀は、宮城県名取市の北釜地区に居を構え、地域のカメラマンとして祭事等を記録すると同時に北釜のオーラルヒストリー(口述史)の作成を開始する。自らの身体を懸けて写真と北釜と関わってきた4年間の試みを包括した個展「螺旋海岸」が2012年11月から3ヶ月間せんだいメディアテークで開催され、大きな反響を呼んだ。

今回は、志賀の生地である岡崎市で、仙台の展示をベースに会場となる岡崎シビコ6階の空間にあわせた新たな構成が試みられる。

「螺旋海岸」2012-2013
せんだいメディアテークでの展示風景
courtesy of the artist



下道基行 (したみち もとゆき / SHITAMICHI Motoyuki)

1978年岡山県生まれ。名古屋を拠点に活動。2001年武蔵野美術大学造形学部油絵科卒業。2003年東京総合写真専門学校研究科中退。砲台や戦闘機の格納庫など日本各地に残る軍事施設跡を4年間かけて調査・撮影し、出版もされた「戦争のかたち」シリーズ(2001-2005)や、アメリカ・台湾・ロシア・韓国など日本の植民地時代の遺構として残る鳥居を撮影した代表的なシリーズ「torii」(2006-2012)など、その土地のフィールドワークをベースにした制作活動で知られる。彼の作品は、風景のドキュメントでも、歴史的な事実のアーカイブでもない。生活のなかに埋没して忘却されかけている物語、あるいは些細すぎて明確には意識化されない日常的な物事を、写真やイベント、インタビューなどの手法によって編集することで顕在化させ、現代の私たちにとってもまだ地続きの出来事として「再」提示するものである。2012年に開催された光州ビエンナーレでは新人賞を受賞。今回は、愛知県内中学校での特別授業によって集めた「境」に関する新作を展示予定。

「bridge」(2011)より



シュカルト (Škart)

1990年結成。セルビアを拠点に活動。ベオグラードで建築を学んでいたドラガン・プロティッチとジョルジエ・バルマゾヴィッチによって結成された。二人は独裁政権のもとで繰り広げられていた民族紛争の時代に、そこで生活する人々のなかに入り込む実践的な活動をおこなってきた。初期の活動では、個人的な悲しみの感情を綴った本の出版、「恐怖」や「休息」などの文字が書かれた配給券《サバイバル・クーポン》を街で配るプロジェクト、歌手になりたい人たちを合唱団として組織し病院や難民キャンプのような歌が必要な場所に連れて行くプロジェクトを実施してきた。またその後も、芸術表現から離れて伝統的な家庭の刺繍によって現代社会に生きる人々の気持ちを表現することや、どこにでもある素材によって植物と一緒に移動できる装置をつくるなど、日常的な個人の感情と結びつくデザインを提案している。彼らは自分たちのコンセプトを「人々の関係性のためのアーキテクチャー」と述べ、詩とデザインの領域のあいだで活動している。

《dish-familysh》(From the series "MOBILE PLANTS") 2010
Installation view at the 12th Venice Architecture Biennale, Venice
photo: skart archive



フロリアン・スロタワ (Florian SLOTAWA)

1972年ローゼンハイム(ドイツ)生まれ。ベルリンを拠点に活動。スロタワは、その制作スタイルを、ものを並べ替えること、あるいは配置されたコンテキストを再設定することとして、何もそこに加えることがない。彼の最初のシリーズは自分の家財道具を美術館の展示室に持ち込んで組み上げることだった。あるいは、美術館の展示室と自らの部屋の家財道具を一時的に交換して展示する。ホテルの一室の家具を、宿泊している間だけ配置換えして、それを撮影するシリーズもある。また、大きな公園に設置されたパブリックアートの数々を大きき順に一列に並べなおすなど、大掛かりなものもある。今回は、美術館の展示室内を、アーティスト自身が競技アスリートのように走り抜けて計測する映像作品のシリーズを展示予定。アーティストが走り抜ける姿とともに、美術館の展示室が運動感とスピード感を持ってガイドされ、展示室のこれまでにない見え方が提示される。

《Museums-Sprints (Alte Pinakothek München, 1:13.26min)》2011
courtesy of Galerie Nordenhake, Berlin/Stockholm; Sies & Hoeke, Duesseldorf



ソン・ドン (SONG Dong)

1966年、北京生まれ。北京在住。90年代後半より国内外で活発な発表を行なう。中国を代表する現代アーティストの1人である。

今回、ソン・ドンは《貧者の智慧：借権園》にて、古い家具や廃屋を再利用して、橋、流水、巨石、植物、山を生み出し、伝統的な庭園を作り上げる。庭は統制のきいた小宇宙を象徴するものだが、出品作品は「借景」と借用権という二つの考えを繋ぎ合わせるものとなっている。「借景」は、伝統的な中国の風景設計概念であるが、後者とは、都市空間をDIY的な方法で、より美的な魅力や機能性に満ちたものとする発想である。ここ10年以上、アーティストは「貧者の智慧」というコンセプトをかかげ、貧しい人々や貧しい国々が、空間や美的な質に対する権利を拡大させて、いかに彼らの暮らしをより良くしているかを表現している。

※作品は9月上旬(予定)からご覧いただけます。

《貧者の智慧・借権園》
2012-2013年
© Song Dong, courtesy of Pace Beijing



studio velocity / 栗原健太郎 + 岩月美穂 (studio velocity / KURIHARA Kentaro + IWATSUKI Miho)

2006年設立。岡崎市を拠点に活動。栗原健太郎（埼玉県出身）と岩月美穂（愛知県出身）はともに1977年生まれ。石上純也建築設計事務所勤務を経て、studio velocityを設立。前衛的なデザインとかわいらしさが共存する新しい感覚の作品によって、国内外の注目を集める若手建築家のユニットである。名古屋の美容室「曲線の小さなワンルーム」（2010）では、敷地にくしゃっと湾曲するボリュームを巧みに配置した。岡崎では、内部に小さく文節された空間を抱えた「白い山のような家」（2009）や、円形のプランの上下に別世界を展開させる「空の見える下階と街のような上階」（2012）などの住宅を手がける。また、個展「fluctuation」（2012）では、環境に応答する繊細なインスタレーションを発表した。今回は、岡崎シビコの屋上にて、無数の白い糸が風にそよぐ、さわやかな空間インスタレーションを制作する予定。また、第13回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展（2012）で展示した「愛知産業大学言語・情報共育センター」や、名古屋市内の「都市に開いていく家」が、オープンアーキテクチャーのプログラムで公開される。

「空の見える下階と街のような上階」2012
courtesy of the architects



菅沼朋香 (すがぬま ともか / SUGANUMA Tomoka)

1986年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。名古屋芸術大学デザイン学部デザイン学科卒業。昭和61年生まれの菅沼は、街の中に埋もれてしまった「昭和らしさ」が残る場所、人や物などを独自の視点においてリサーチし、映像作品《バックトゥーザ昭和》や、屋台型インスタレーション《まぼろし屋台》、そしてアートブックなどの形式で発表している。フィールドワークの手法を用いて、昭和から残る純喫茶やスナックなどに出向き、その場所で出会う人々との関係を構築しながら、彼らのエピソードや記憶を拾い上げ、現代に残る昭和のかたちを探り出そうとする。また、彼女自身の昭和への憧れを体現するかのよう、自らの日常生活においても、そのファッション、生活のスタイルまでも「昭和らしさ」は徹底されている。彼女が行うパフォーマンスもまた作品の重要な要素となっている。今回は、あいちトリエンナーレ2013の会場となる、長者町繊維卸問屋街の中に残された「昭和らしさ」を、長者町で昭和より活動している経営者らへのインタビュー等を元に掘り起こす新作を発表する予定。

《バックトゥーザ昭和》2011
photo: 大畑沙織



杉戸 洋 (すぎと ひろし / SUGITO Hiroshi)

1970年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。1992年愛知県立芸術大学美術学部日本画科卒業。1990年代半ばにはその実力が認められて海外でも紹介されていた。2001年に愛知県美術館で個展。2006年にアメリカのフォートワース近代美術館で個展「Focus」を開催。2011年に青木淳との二人展が青森県立美術館で予定されていたこともあり、彼はその準備のために名古屋と青森の間を頻繁に通っていた。展覧会は震災のために中止されたが、2012年にケンジタキギャラリーで発表された近作群には、彼が見ていた東北の風景と、彼が訪れた美術館で見た絵画が登場している。今回は、青木淳が黒川紀章が設計した名古屋市美術館を研究して新しい見え方を提案し、それを受けて杉戸が二階部分で新作による展示を行う。

《house on the hill》2012

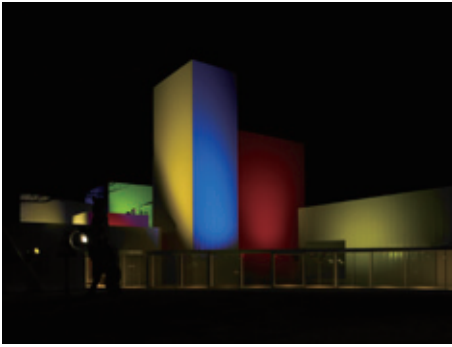


ミカ・ターニラ (Mika TAANILA)

1965年ヘルシンキ（フィンランド）生まれ。ヘルシンキを拠点に活動。ヘルシンキ大学で文化人類学を学んだ後、ラハティデザイン研究所の映像学科を卒業。科学技術の進歩に関心を寄せるターニラの作品は、記録映像と実験映画の両方の側面を持ち、現実とファンタジーを行き来する。テクノロジーと芸術が融合したユートピアや近未来的ビジョンは、一方で考古学や科学ファンによるアマチュアフィルムのような好奇心も覗かせながら、さまざまな角度から社会の中心に据えられた技術開発を観察、検討している。今回は、フィンランド南西部ユーロキ自治州に2014年完成予定の原子力発電所「オルキルオト3」を撮影した映像作品《The Most Electrified Town in Finland》を展示予定。西欧ではチェルノブイリ原子力発電所事故後に作られた最初の原発。本作は10年近い年月をかけて制作され、2012年のドクメンタ13で発表されたことで知られる（日本初公開）。人口6千人ほどの小さな町で、新たな原子炉が建設されていく様が淡々と映し出される。その賛否を議論するアプローチはなく、見る者に国家権力と地域の関係、ならびに経済効果を生む原子力エネルギー依存に陥った町の運命について考えさせる。

《フィンランドで最も電化した町》2004-2012

©Kinotar
courtesy of the artist and Kinotar Oy
photo: Anders Sune Berg in dOCUMENTA (13), Kassel, Germany, 2012



高橋 匡太 (たかはし きょうた / TAKAHASHI Kyota)

1970年京都府生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。90年代後半より光と映像を用いた作品を数多く発表する。屋内空間でのインスタレーションから、パフォーマンスとの共同制作、そして建築物への大規模なプロジェクションと多岐にわたる。とりわけ、建築物のライトアップでは、水玉やストライプといった幾何学模様、映像、色彩を自在に組合せ、建築を大胆に解釈、ダイナミックに変貌させてみせる。十和田市現代美術館の常設作品《いろとりどりのかけら》(2008)では、白い箱が並んだような美術館建築の面ごとに異なる色の光を当て、時間とともに移り変わる色面が幻想的な風景を生み出している。また、一人ひとりの夢が書かれた紙にLED照明を取りつけた「夢のたね」を、気球に積んで夜空に降らせ、舞い落ちた誰かの夢を持ちかえる「夢のたねプロジェクト」(2005-)をはじめ、参加型プロジェクトも多数行う。視覚的な美しさだけでなく、人の心や記憶を照らします光の可能性に挑戦し続けるアーティストである。

今回は、多くの人を巻き込みながら、名古屋の都市空間を活用したプロジェクトを発表する。

《いろとりどりのかけら》2008
photo: 北村光隆



竹田 尚史 (たけだ ひさし / TAKEDA Hisashi)

1976年愛知県生まれ。名古屋を拠点に活動。2004年名古屋造形芸術大学美術学科彫刻コース卒業。2006年名古屋造形芸術大学大学院環境造形コース修了。竹田は在学中から大学内に仮設のギャラリーを作り、同世代のアーティストたちと発表の場をつくっていた。落下する瞬間を切り取った浮遊するスプーンの写真、鏡の中で正しく見える反転した時計など、時間、空間や質量などの哲学や自然科学的なテーマを想定しながらも、実際には身体スケールでの展示を行っている。「世界は確かに存在する、しかしそれを確かな物にする基準はまだ発見されていない」と語る竹田の作品は、不確かなものと確かなものとの間で行き来することで、独特のユーモアを作り出している。

今回は会場に、秤の上に載せられた家を展示する予定。

《ダブルフィクション》2013



ブーンスイ・タントロンシン (Boonsri TANGTRONGSIN)

1978年タイ生まれ。タイとスウェーデンを拠点に活動。1999年にバンコク大学、2007年にマルメ・アート・アカデミー(スウェーデン)を卒業。今回彼女は約11分間の《Superbarbara Saving the World (スーパーバーバラ世界を救う)》(2012)を展示する。数章からなる本作は、世界で頻発する、決して解決されることのない問題を扱った手書きアニメーションである。各章で展開される問題の一つ一つは誰にとっても理解できる。なぜなら、いたる所で起こっているだけでなく、解決しようと試みる人々の間に、同じフラストレーションを与えているからである。作家本人は以下のように解説する。「スーパーバーバラはアダルトグッズから世界の救世主へと変身した旧式のセックス・ドールです。彼女は自らの方法で問題を解決します。スーパーバーバラはヒーローであるとともに、問題の犠牲者でもあります。時折、これらの問題を解決しようとする人が現れます。しかし、遅かれ早かれヒーローは姿を消すだけで、そのトラブルは依然として続いていくのです。」《スーパーバーバラ世界を救う》は数々の賞を受賞し、タイ、チェコ、スウェーデン、韓国、中国、オーストラリアでも発表されている。

《スーパーバーバラ世界を救う》2012
courtesy of the artist



渡辺 豪 (わたなべ ごう / WATANABE Go)

1975年兵庫県生まれ。東京を拠点に活動。2000年に愛知県立芸術大学美術学部油画科卒業。2002年愛知県立芸術大学美術研究科油画専攻修了。2010年に愛知県美術館で個展「現代美術の発見VI渡辺 豪 白い話 黒い話」を開催。ライトボックス形式の平面作品においても、動画においても、コンピュータを使っている緻密な作業によって作り上げられた漂白されたようなモチーフが特徴的である。その表現は、その特異な人物像も含めて、動画であれば、そのゆっくりとした動き、静止画であれば、かすかに付与された輝きのモチーフによって、動くものと静止したもの、生命と非生命の境界線を静かに問いかけるものにもなっている。

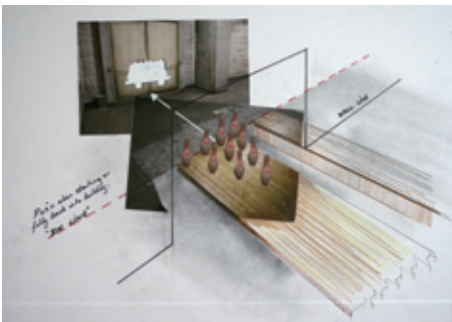
《"one landscape," a journey》2011



和田礼治郎 (わだ れいじろう / WADA Reijiro)

1977年広島県生まれ。ベルリン(ドイツ)を拠点に活動。2000年に広島市立大学芸術学部美術学科彫刻専攻を卒業、2002年同大学院美術学術研究科博士前期課程彫刻専攻を修了。加えて、2008年に東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程彫刻専攻を修了した。ドイツを中心とするヨーロッパでのグループショーに参加。石を含むさまざまな素材を彫刻の素材として扱うが、2010年より、シリーズで発表している代表的な作品は、真鍮で縁取った複層ガラスを水面と同化するよう浮かべ、水面そのものの存在を視覚化し作品化する「ISOLA(イゾラ)」である。イゾラとはイタリア語で島のこと。これは人間の身体スケールに由来する量モジュールを浮かべるもので、強化ガラス2枚の間に密閉された空気によって、水面と同じ高さに浮かぶ構造になっている。近くから見ると、空を映し出す人工的な幾何学形態であり、遠景では自然の波のきらめきのひとつに同化している。

《ISOLA》2012
Installation view at Haus am Waldsee, Berlin
courtesy of the artist
photo: Bernd Borchardt



リチャード・ウィルソン (Richard WILSON)

1953年ロンドン生まれ。ロンドンを拠点に活動。ロンドン・カレッジ・オブ・コミュニケーション、ホーンゼイ芸術大学やレディング大学で学ぶ。1988年と1989年に、世界でも著名な芸術賞である英国のターナー賞にノミネートされた。これまでシドニー、サンパウロ、ヴェネツィア・ビエンナーレや、横浜、越後妻有アートトリエンナーレなどに参加している。建築的な、空間への大胆な介入は彼の作品の特徴であり、2008年に開催されたリバプール・ビエンナーレでは、ビルの壁に直径およそ8メートルの円形の穴を開け、回転させるという作品で大いに話題となった。

今回発表する、納屋橋の建物での《レーン61》(2013年)は、10本ピンのボーリングのレーンの考古学にまつわるものであり、その建物の過去と未来の両方を目の前に示す。この作品は「われわれはどこに立っているのか?」を問いかける一そしてそれはまた、都会の環境の儂さと、それを常に作り直してゆく必要性を示している。

Plan drawing for 《Lane 61》, 2013



ケーシー・ウォン (Kacey WONG)

1970年香港生まれ。香港を拠点に活動。彼は建築と美術を学んだ後、香港理工大学のデザイン学部にて教鞭をとる。数層の高いハイアートではなく、日常の延長として建築的なアートが社会にもたらす力を探求している。香港現代美術アワード(2012)など多数受賞。第11回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展(2008)の香港セクションでは、屋台式のようなモバイル三輪車プロジェクト《さすらう家屋》を展示した。ほかにも、香港・深圳都市/建築ビエンナーレに出品された移動するベッド《スリープ・ウォーカー》、海上に浮かぶ《漂流する家屋》、ホームレスが活用できるロボット風の彫刻など、作品は社会批評の色彩が強い。2000年以降から続く《ドリフト・シティ》は、紫禁城、ピラミッド、シュレーダー邸など、世界各地の建築の名所を訪れ、本人が摩天楼の着ぐるみをして記念撮影するシリーズだ。近年はパフォーマンス、デモ、展示企画を通じて、中国の愛国教育に対する異議申し立てやアイ・ウェイウェイの解放運動などを行っている。そうした彼の活動は、香港の揺れ動くアイデンティティの表出にもなっている。今回は、ドリフト・シティなどを展示するほか、尖閣諸島を題材にしたインスタレーションも制作する。

《ドリフト・シティ》カイロ(エジプト・アラブ共和国)、2002年
courtesy of the artist



山下拓也 (やました たくや / YAMASHITA Takuya)

1985年三重県生まれ。京都を拠点に活動。2010年名古屋造形大学美術学科総合造形コース卒業。2013年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了。山下は名古屋造形大学の在学中より、愛知県内のグループショーに出品し、まちなか、展示される建物や展示空間の特性、そしてその細部を生かした立体作品を展示してきた。その展示の発想には、思いもよらない奇抜なユーモアとゲーム感覚があり、鑑賞者の関心を鮮やかに惹きつけるか、非常に困惑させる。既存のものを多く使用するその展示方法と素材に対する感覚、そして色彩感覚は、スマートさとは無縁である。空間を占拠して、ポップで土俗的ともいえる感性で押し通し、鑑賞者にいやがおうでも、作品に反応するように引き込んでいく。また、ボスカを使って描かれた小さな絵は、密度と同時に孤独を感じさせる、魅力的な作品群である。

《花瓶の絵》2012



やなぎみわ (YANAGI Miwa)

兵庫県生まれ。京都を拠点に活動。京都市立芸術大学大学院美術研究科修了。1990年代後半より、若い女性をモチーフに、CGや特殊メイクを駆使した写真作品を発表し、とりわけ、制服を身につけた案内嬢たちが商業施設空間に佇む「エレベーターガール」のシリーズで注目を集めた。2000年より、女性が空想する半世紀後の自分を写真で再現した「マイ・グランドマザーズ」シリーズ、少女と老婆が登場する物語を題材にした「フェアリーテイル」シリーズ等を手がける。2009年、第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。2010年より演劇公演を手がけるようになり、2011年から新たに演劇プロジェクトを始動させた。大正期の日本を舞台に、新興芸術運動の揺籃を描いた「1924」三部作、明治後期のパノラマ館などを舞台にした「パノラマ」シリーズを美術館と劇場、双方で上演している。

今回の「案内嬢プロジェクト」では、参加者を一般公募し、ワークショップを実施。講座を修了した女性たちは、「案内嬢」となって愛知芸術文化センターを訪れた観客を出迎える。ガイドツアー形式の「案内嬢パフォーマンス」(やなぎみわ構成・演出)では、フィクションと現実が交錯する、やなぎならではの「あいちトリエンナーレ案内」を体験することができる。

「案内嬢プロジェクト」2012
鉄道芸術祭vol.2「駅の劇場」(京阪電車なわ橋駅アートエリアB1)
photo: 井上嘉和



ヤノベケンジ (YANOBE Kenji)

1965年大阪生まれ。大阪と京都を拠点に活動。90年代は、ガイガー・カウンターを装備した《アトムスーツ》を自ら着用し、原発事故後のチェルノブイリを訪れるなど、世紀末的なサバイバル・プロジェクトで注目を集めた。しかし、新世紀を迎えると、制作テーマをリバイバルへと移行させると同時に「太陽」をシンボルに掲げ、「未来の廃墟」から2本足で立ち上がる3mの人形《スタンダ》や、解体されたエキスポタワーの断片から生命の塔を再生させる計画など、次世代に向けてポジティブな想像力とメッセージを強く打ちだしていく。また、2010年発電所美術館での「ミュトス」展では、天井に吊り下げた水瓶に5tの水をしたため一気に放出するインスタレーション《大洪水》を手がけ、予言的なまでに時代に鋭く斬り込む作品で人々を震撼させた。そして東日本大震災後、希望のモニュメントとして、防護服のヘルメットを脱いだ6mの子ども立像《サン・チャイルド》を発表し、太陽の塔の広場や第五福竜丸展示館、モスクワやイスラエルなどの世界規模で巡回を続けている。

今回の展示では、ビートたけし原画のスタンドグラスやマティスの版画を用いた太陽の神殿を構築し、実際の結婚式を開催できる場を出現させる。

《太陽の結婚式》のためのドローイング 2013
© YANOBE Kenji



横山裕一 (よこやま ゆういち / YOKOYAMA Yuichi)

1967年宮崎県生まれ。東京を拠点に活動。武蔵野美術大学油絵科卒業後、漫画家として活動し、2004年に「ニュー土木」で単行本デビュー。横山は、人物の何らかの行為や物体の移動、変形などに伴う時間の流れを描くことを意識し、タブローではなく漫画という形式を選択している。自ら「ネオ漫画」と呼ぶその漫画作品では、自然と人工物が奇妙に融合した近未来的な風景を舞台に、特異なファッションに身を包んだ無表情なキャラクターたちが目的の不明瞭な活動を繰り返しながら描かれる。セリフを殆ど用いずに、オノマトペと効果線を多用しながら進行するスピード感のあるコマ展開によって、まったく新しい漫画表現を確立し、国内外で高く評価されている。『トラベル』(2006)『ヘビーブーム』(2009)などの国内外での単行本の刊行と並行して、2010年川崎市民市民ミュージアムでの個展「横山裕一 ネオ漫画の全記録: わたしは時間を描いている」をはじめ多数の美術館やギャラリーでの展覧会に参加。

今回は、その漫画世界と現実の都市風景とをリンクさせ、まちなかの様々な場所にコマを展開し、まちを「読む」ような仕掛けを行う。

『世界地図の間』2013



米田知子 (よねだ ともこ / YONEDA Tomoko)

1965年兵庫県生まれ。ロンドンを拠点に活動。1989年イリノイ大学シカゴ校芸術学部写真学科卒業後、1991年ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アート修士課程修了。戦争や災害や政治体制の変化などを経験した場所に潜む、可視化されない記憶や歴史をテーマにした写真作品で知られ、2008年原美術館での個展をはじめ、2007年第52回ヴェネツィア・ビエンナーレ、2005年ならびに2011年横浜トリエンナーレなど数々の国際展で高い評価を受けている。フォト・ジャーナリストを目指して写真を学び始めた米田の作品は、徹底した客観性に裏打ちされている。

今回は「震災から10年」シリーズから、1995年の阪神淡路大震災直後に米田の出身地に隣接する神戸周辺を撮影したモノクロ写真7点と、2004年に芦屋市内を撮影した大判カラー写真6点、そして2011年に取り組んだ『積雲』よりカラー写真6点を展示予定。日本の近現代史にまつわる象徴的なモチーフや、戦争、災害、政治体制の変化などを経験した特有の場所に潜む、可視化されない記憶や歴史が一気に立ち上がる。写真に見えるものと見えないものの中に横たわる時間を読み解くことによって、米田の写真は私たち自身の存在と現代性を問いかける。

《川(両サイドに仮設住宅跡地、中央奥に震災復興住宅をのぞむ)》(「震災から10年」より) 2004
courtesy of ShugoArts, Tokyo and The National Museum of Art, Osaka



ARICA + 金氏徹平 (ARICA + KANEUJI Teppei)

ARICAは2001年、演出・美術の藤田康城、テキスト・コンセプトを担当する詩人・批評家の倉石信乃、太田省吾が主宰した元転形劇場俳優の安藤朋子らにより設立。演劇やダンスといった枠を超え、ビジュアルアートや音楽、建築やデザインなどと呼応するパフォーマンスを上演して注目を集める。カイロ国際実験演劇祭や、ニューヨークのジャパン・ソサエティー、デリーの国際演劇祭などでも公演を行った。今回上演する『しあわせな日々』はサミュエル・ベケットの代表作のひとつで、特に目を引くのが主演女優が埋もれる山のような舞台美術。その「山」を、1978年生まれのアーティスト金氏徹平が設計する。金氏は、日用品などレディメイド素材を白い石膏や樹脂で覆ったコラージュ的彫刻や、相異なる線画を延々とつなげてゆくドローイングなどで知られ、2009年には、30歳の若さで大規模個展を横浜美術館で開催した。テキスタイルコーディネーター・デザイナーの安東陽子が衣裳を担当する。

「恋は闇／LOVE IS BLIND」2012年
photo: 宮内勝

サミュエル・ベケット (Samuel BECKETT)

1906年、ダブリン(アイルランド)生まれ。フランス語と英語で書いた劇作家・小説家・詩人。『モロイ』に始まる小説3部作でヌーヴォー・ロマンへの道を拓き、『ゴドーを待ちながら』(1953年初演)によって不条理演劇の巨匠と認められる。新しいメディアにも関心を寄せ、テレビやラジオ作品も創作・発表している。1969年、ノーベル文学賞を受賞。現代文学を革新したジェイムズ・ジョイスの助手を務め、現代アートの父マルセル・デュシャンとはチェスを通じての交流があった。1989年、パリにて死去。上映予定の『クワッド』は、ベケットが晩年(1981年)に発表したテレビ作品。マントに身を包んだ4人のパフォーマンスが、正方形の各辺と対角線の上を、ある規則性に基づいて早足で歩き続ける。哲学者ジル・ドゥルーズは「ベケットのテキストはまったく明確である。空間を消尽することが問題なのだ」(『消尽したもの』宇野邦一訳)と書いている。



藤本隆行 + 白井 剛 (FUJIMOTO Takayuki + SHIRAI Tsuyoshi)

インディペンデントディレクター・照明デザイナーの藤本隆行は、1987年よりダムタイプに参加し、主に照明・テクニカルマネージメントを担当する。個人としての活動では、2007年、白井剛、川口隆夫、真鍋大度ら9名のアーティストと共に製作したパフォーマンス作品『true/本当のこと』を発表。海外も含めた多くのアーティストとコラボレーションを行い、LED照明をはじめとするデジタルデバイスと人体の高密度の同期化に焦点を当て、有機的な舞台を構築している。振付家・演出家・ダンサーの白井剛は、伊藤キム+輝く未来、Study of Live Works 発条トでの活動を経て、現在ソロユニットAbsTをベースに、独舞から共同プロジェクトまでさまざまな形態で、身体と空間/時間のダンスを模索する。映像や現代音楽と親和性の強いダンスで高い評価を受け、バニョレ国際振付賞をはじめ、国内外の賞を受賞している。今回は、舞踏、コンテンポラリーダンスとデジタルテクノロジーを融合した最新作『Node/砂漠の老人』を発表する。

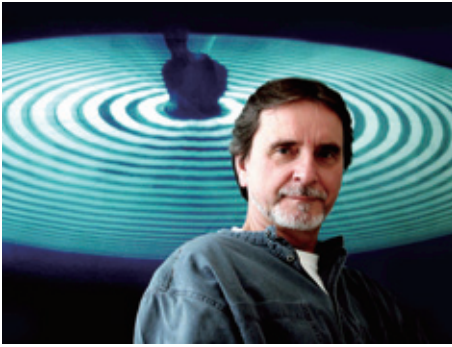
photo: Hideto Maezawa



ほうほう堂 (Ho Ho-Do)

新舗美佳と福留麻里による身長155cmダンスデュオ。これまでに国内外20都市以上で作品を発表。2009年からは劇場から飛び出し、その日の天候や道行く人々を含め、その場所にしかない魅力や特徴を背景に、そのとき限りのサイトスペシフィックなスペシャルダンスを披露する「ほうほう堂@」シリーズを展開している。カフェ、建物の廊下、学校、トンネル、民家をはじめ、日常と隣り合わせにある面白そうな場所や、旅先で出会った場所、紆余曲折の果てに辿り着いた穴場スポットなど、月に1回さまざまな場所で踊り、YouTubeにアップ。また、ほうほう堂の振付に、複数のミュージシャンが異なる音楽を合わせることで、これまでとは違う作品の見え方を引き出す「ほうほう堂×DJs!!」シリーズを行うなど、ダンスの拡張を多種多様な方法で試みている。今回は、長者町を中心に名古屋の中心街をリサーチし、まちを舞台にその街ならではの光景、記憶、人が関わる新作『ほうほう堂@おつかい』を発表する。同時にその作品はウェブ上でどこからでも観ることのできる番組としても生中継配信される。

photo: 吉次史成



イリ・キリアン (Jiří KYLIÁN)

1947年プラハ（チェコ）生まれ。振付家。1967年、英国ロイヤル・バレエ学校に入学し、1968年にジョン・クランコの招きでジュツツガルト・バレエに入団。1973年、オランダのハーグを拠点とするネザールランド・ダンス・シアター（NDT）の振付を初めて行う。以来、同カンパニーとの関係を深め、1978年に芸術監督に就任。1999年に退任したが、50作以上をNDTと共に創作した。2011年には、映像アーティストのジェイソン・アキラ・ソンマ（米国）と『Anonymous—a dance and video installation』を発表。現代バレエ／ダンスの最も重要な振付家の1人として、ますます精力的に創作を続けている。オランダ王国オレンジ・ナッソー勲章など受賞多数。キリアンの振付作品は、パリ・オペラ座バレエをはじめ世界中の名だたるバレエ団やダンスカンパニーが上演しているが、今回上演するのはベケットの『……雲のように……』に想を得た新作『East Shadow』。あいちトリエンナーレ2013での公演が世界初演となる。ハーグ在住。

courtesy of the Kylian Foundation



ままごと (mamagoto)

劇作家・演出家である柴幸男（1982年愛知県一宮市生まれ、平成23年度愛知県芸術文化選奨文化新人賞受賞）の作品を上演する団体。あいちトリエンナーレ2010 祝祭ウィーク事業出演団体。何気ない日常の機微を丁寧にすくいとる戯曲と、演劇外の発想を持ち込んだ演出から普遍的な世界を描く。演劇を「ままごと」のように身近に。より豊かに。今回は、子供も大人も楽しめる作品『日本の大人』を創作する。実家のある愛知に長期滞在し、現在の子供たちが想像するであろう未来、その子供たちがいつか辿り着くはずの未来、さらに子供たちが大人になってまだまだ続いていく未来…と、「子供の時間」の延長線上にある「大人の時間」、「大人の姿」を描き出す。「嘘（ほら話）」と「仕事」を軸に、子供と、かつて子供だった大人が、それぞれの目線で“今”を見つめ直す作品。

『朝があるー』
photo: 青木司



マチルド・モニエ (Mathilde MONNIER)

1959年生まれ。1986年に『Cru』にてバニョレ国際振付コンクール・フランス文化省賞受賞。1994年よりラングドグールシヨンのモンペリエ国立振付センターの芸術監督を務め、異なったジャンルのアーティストたちとのコラボレーションシリーズを開始。特にジャズミュージシャンのルイ・スクラヴィスに影響を受ける。共同体の観点から身体や空間へのアプローチを行い、自閉症患者を対象とした活動に取り組んでいる。アヴィニヨン・フェスティバルにて多数の作品を発表してきた、西欧のコンテンポラリーダンス界を牽引する旗手の1人。モニエとジャン・フランソワ・デュルールの共同製作により創作された2つのデュオ、1984年の『PUDIQUÉ ACIDE』と1985年の『EXTASIS』を、2011年に再振付した『ビュディック・アシッド』『エクスタシス』をもって、待望の初来日となる。

photo: Marc Coudrais



向井山朋子 + ジャン・カルマン (MUKAIYAMA Tomoko + Jean KALMAN)

向井山朋子はアムステルダムを拠点に活動。1991年にオランダの国際ガウデアムス演奏家コンクールで優勝して以来、ピアニストとして、国際的に活動するオーケストラなどと共演するほか、映画監督、デザイナー、建築家、写真家、振付家らとのコラボレーションを行う。近年はビジュアルアーティストとして『for you』（横浜トリエンナーレ2005）、『you and bach』（シドニー・ビエンナーレ2006）、『wasted』（越後妻有トリエンナーレ2009）などのインスタレーション作品を創作。2012年には、ダンス作品『シロクロ』（ダンストリエンナーレトーキョー2012）を創作・発表した。ジャン・カルマンは1945年パリ生まれ。1979年より、ダンス、演劇、オペラの舞台美術と照明デザインを手がける。カレル・アペル、ゲオルク・バゼリッツ、ヤニス・クネリス、アニッシュ・カプーアラ美術家、マウリシオ・カーゲル、ハイナー・ゲッベルスら作曲家と協働して舞台作品を制作。クリスチャン・ボルタンスキーとのコラボレーションも数多く、特に越後妻有トリエンナーレでの作品が知られている。1991年ローレンス・オリヴィエ賞照明部門を受賞。2011年には、ドラマ・デスク賞最優秀照明賞にノミネートされた。2012年より、ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのアソシエイティッドアーティスト。今回は協働で、ベケットの『いざ最悪の方へ』に着想したパフォーマンス／インスタレーション作品『FALLING』を発表する。

photo: Philip Mechanicus (左)
photo: 向井山朋子 (右)



アルチュール・ノジシエル (オルレアン国立演劇センター) (Arthur NAUZYCIEL (Centre Dramatique National d'Orléans))

1967年パリ生まれ。造形美術と映画を学んだ後に、シャイヨー国立演劇学校で演劇を学ぶ。俳優として活動するかたわら、シェイクスピア、モリエール、チャーホフ、ベケットから現代作品に至るまでの戯曲を多数演出。2007年からは、オルレアン国立演劇センターのディレクターを務めている。今回上演する『L'IMAGE』(日本初演)は、ベケットによる同名の掌編小説をテキストとして用いた朗読+ダンスパフォーマンス。死の床にあるとおぼしき男が、女や犬と共に過ごしたある春の1日を回想するという内容。数ページほどの短さだが、結語にたどり着くまで句読点は一切ない。朗読は女優ルー・ドワイヨン(映画監督ジャック・ドワイヨンと女優兼歌手ジエーン・バーキンの娘)、ダンスは、ウィム・ヴァンデケイピュス作品に出演したほかシディ・ラルビ・シェルカウイとの10年以上に及ぶ協働で知られるダミアン・ジャレ、音楽はウィンター・ファミリーが担当する。

photo: Christian Lartillot



プロジェクトFUKUSHIMA! (PROJECT FUKUSHIMA!) (総合ディレクション:大友良英)

東日本大震災と、震災によって引き起こされた東京電力福島第一原子力発電所の事故は、地震と津波の被害に加え、放射能汚染という未曾有の事態を福島にもたらした。その福島から、「いまの福島」と「未来の福島」の姿を全世界に向けて発信していこうとするプロジェクト。福島出身/在住の大友良英(音楽家)、遠藤ミチロウ(音楽家)、和合亮一(詩人)の3名を代表とし、県内外から集まった有志によって2011年5月に立ち上げられた。同年8月15日に福島市内で開催した「フェスティバルFUKUSHIMA!」には約1万人が来場し、翌年は「世界同時多発フェスティバル」に拡大。その他、インターネット放送局「DOMMUNE FUKUSHIMA!」の運営、学びの場となる「スクールFUKUSHIMA!」の実施、共鳴するアーティストによる作品発表の場と支援金募集の仕組みを兼ねた「DIY FUKUSHIMA!」など、複数の活動を継続的にを行っている。今回は、参加型ライブ『オーケストラFUKUSHIMA in AICHI!』を上演。

「オーケストラFUKUSHIMA!」2011年8月

photo: 藤井光



清水靖晃 + カール・ストーン (SHIMIZU Yasuaki + Carl STONE)

清水靖晃は作曲家・サクソフォーン奏者。J.S.バッハ『無伴奏チェロ組曲』を史上初めてテナーサクソフォーンのために編曲・演奏・録音し、1997年にアルバム『バッハ・ボックス』でレコード大賞企画賞を受賞。2007年には5音階作品を収めたアルバム『ペンタトニカ』を発表した。カール・ストーンは1953年ロサンゼルス生まれの作曲家。1972年に電子アコースティック音楽の作曲を始め、コンピューターミュージックの先駆者の1人とされる。多数の音楽家と共演する一方、中京大学大学院情報科学研究科(メディア科学専攻)の教授も務めている。今回上演する『Just Breathing』では、2人の作曲家/演奏家が「呼吸=空気圧=音響」をテーマに、お互いの、観客との、そして「場」とのコミュニケーション/インタラクションを追求する。閉ざされていたはずの時間=空間が「インテュイティブロビゼーション(直感即興演奏)」によって開放される瞬間を、身体の最小単位である細胞レベルで体感したい。

photo: 小西康夫(左)

photo: 上芝智裕(右)



ジェコ・シオンポ (Jecko SIOMPO)

1975年生まれ。インドネシアのジャバプラで育つ。幼少のころより伝統舞踊を学び、1994年にジャカルタ・アーツ・インスティテュートに入学してダンスを専攻。1999年、ヒップホップをアメリカのポートランドで学ぶ。2002年、奨学生としてドイツのフォルクスヴァンク・ダンス・スタジオにて学ぶ。インドネシアのさまざまなダンスのスタイルを学んだが、その実践にとどまらず、バプアの文化的背景を生かした独自のスタイルを追求しながら、振付作品を発表している。作品はインドネシア国内各地をはじめ、マレーシア、シンガポール、日本、ドイツ、デンマーク、オーストリア、アメリカ、フランス、台湾、香港、韓国そしてロシアなどにて上演。バプアのダンス文化とのフュージョンという側面だけでなく、ジャカルタのサブカルチャーであるヒップホップを、自身の振付の世界に持ち込んだ。今回の『Terima Kos (Room Exit)』は、カンパニー作品としては待望の日本初公演となる。



梅田宏明 (UMEDA Hiroaki)

2002年にフランスのRencontres Chorégraphiques Internationalesのディレクターに評価され活動を海外に拡げる。その後、ヨーロッパを中心に世界各地の主要フェスティバル・劇場に招聘され、2008年にはFestival d'automne à Paris及びRomaEuropaと共同製作を行う。2011年、YCAMとの共同製作で『Holistic Strata』を発表。2009年、振付プロジェクト「Superkinesis」を立ち上げ、初のグループ作品『1. centrifugal』を、2010年にヒップホップダンサーを採用した『2. repulsion』を、2011年にバレエダンサーの振付作品『3. isolation』を発表。2010年、Prix Ars Electronica 2010 Honorary Mentionを受賞。近年はビデオインスタレーションなどへも表現活動を拡げ、あいちトリエンナーレ2010では『Haptic installation version』を発表。今回、『Holistic Strata』と共に上演する、アジアダンサーによる『4. temporal pattern』は、梅田にとってアジア初の劇場間共同企画により製作される最新作。

photo: S20



ペーター・ヴェルツ + ウィリアム・フォーサイス (Peter WELZ + William FORSYTHE)

ドイツ人マルチメディアアーティストと、アメリカ人振付家によるコラボレーション。1972年生まれのヴェルツは、ロンドン、ニューヨーク、ダブリンでアートと彫刻を学び、主に彫刻や映像インスタレーションを制作・発表している。フォーサイスは世界最高の振付家の1人。バレエの実践を、古典的なレパートリー上演から21世紀にふさわしいダイナミックな芸術形式へと方向転換させたことで知られ、根本的な組織原理への深い関心によって、インスタレーション、映像、ウェブベースの知識創造など、幅広い創作活動を行っている。2004年に発表された本作『whenever on on on nohow on | airdrawing』は、ソロで踊るフォーサイスを5台のカメラ(内2台は本人が装着)で捉え、5チャンネルビデオで見せる画期的な映像インスタレーション。フォーサイスが空中に書き記す作品タイトルは、ベケットの散文作品『いざ最悪の方へ』に由来する。

Installation view Museum für Moderne Kunst MMK, Frankfurt 2004
courtesy of the artist, Peter Welz | Studio
photo: Klaus Peter Hoppe



やなぎみわ (YANAGI Miwa)

兵庫県生まれ。美術作家。2009年第53回ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館代表。2010年より活動領域を演劇にも広げ、2011年から「やなぎみわ演劇プロジェクト」を始動。演出・脚本・美術・衣裳デザインなどを手掛ける。2011年から12年にかけて、大正期の日本を舞台に、築地小劇場やマヴォなど新興芸術運動の揺籃を描いた『1924』3部作を制作・上演。続けて2012年に明治後期のパノラマ館などを舞台にした『パノラマ』シリーズを発表。今回上演する『ゼロ・アワー 東京ローズ最後のテープ』は「声というアーカイブの亡霊」をテーマに、ベケットの戯曲『クラブの最後のテープ』を織り込んだ新作。装置デザインをトラフ建築設計事務所が、音響デザインをフォルマント兄弟が担当する。

photo: 木村三晴



カルロ・モンタナーロ (Carlo MONTANARO) 〈指揮〉

巨匠スービン・メータにその才能を見いだされたイタリア人指揮者。2001年にフィレンツェ歌劇場でオペラ・デビュー以来、ミラノ・スカラ座、ローマ歌劇場、バレルモのマッシモ劇場、ヴェローナ野外劇場、フェニーチェ歌劇場、ベルリン・ドイツ・オペラなど主要歌劇場で指揮し、高い評価を受けている。特にイタリアオペラでは定評があり、近年指揮者としての評価がますます高まっている。

日本では2009年に新国立劇場で「蝶々夫人」を指揮してデビュー。好評を博し、2012年11月に「セビリアの理髪師」でも再登場した。



田尾下 哲 (たおした てつ / TAOSHITA Tetsu) 〈演出〉

兵庫県生まれ。東京大学工学部建築学科卒業。同大学院学際情報学府修士課程修了。オペラ演出をミハエル・ハンベに学び、新国立劇場でチーフ演出スタッフとして約70のプロダクションに参加し、日生劇場、二期会等でも演出を担当。09年、チューリヒ歌劇場『カヴァレリア/道化師』で、共同演出・振付を担当し、ヨーロッパデビュー。以後、コーミッシェ・オーバー・ベルリン『ラ・ボエーム』（アンドレアス・ホモキ演出）、NYリンカーンセンター『神経症ギリギリの女たち』（パートレット・シャー演出）などに参加。ミュージカル演出ではホリプロ『ボニー&クライド』、東宝『ソングス・フォー・ア・ニュー・ワールド』、フジTV『プロミセス、プロミセス』などがあり、劇作家としての活動も控えている。平成21年度五島記念文化賞オペラ新人賞受賞。

photo: 平岩亨



安藤赴美子 (あんど う ふみこ / ANDO Fumiko) 〈蝶々さん〉

北海道出身。国立音楽大学声楽学科卒業、同大学院声楽専攻（オペラ）修了。新国立劇場オペラ研修所第3期生修了。文化庁派遣芸術家在外派遣員としてイタリアに留学。パオラ・モリナーリ、セルジョ・ベルトゥッキの各氏等に師事。2009年東京二期会『椿姫』（宮本亜門演出 新制作）ヴィオレッタ役でプリマドンナとしての将来性を十分に印象付けた。2012年びわ湖ホール・神奈川県民ホール共同制作オペラ『タンホイザー』エリザベト役で出演。2013年には同プロダクション『椿姫』にヴィオレッタ役で出演。二期会会員。



カルロ・バリッチェリ (Carlo BARRICELLI) 〈ピンカートン〉

イタリアのベネヴェント音楽院で学び、その後F.コレリ、P.ヴェントゥーリの下で研鑽。ピンカートン役とロドルフォ役でオペラデビュー。イタリア紙ラ・ナツィオーネから「強靱で活力に満ちた声に支えられたロマン的英雄の役に完全になりきるテノール」と評される。特にピンカートンでは、ヴェローナ野外劇場（ゼッフィレッリ演出）、シュトゥットガルト州立歌劇場（レイゾッティ指揮）、プッチーニ音楽祭がある。プッチーニを得意としており、理想的な声を持つテノールである。



ガブリエーレ・ヴィヴィアーニ (Gabriele VIVIANI) 〈シャープレス〉

イタリアのルッカ生まれ。G.ボリドーリに師事しながら、ルッカのボッケリーニ音楽院で学ぶ。キャリアリオペラ劇場モーツァルト・コンクールで優勝し、ドン・ジョヴァンニとフィガロの役を与えられる。またカッシーナ・オペラ・コンクールでマスカーニ賞を受賞。グノー『ファウスト』ヴァランタン役でデビュー。トリエステで2004/05シーズンの最優秀歌手賞を受賞。ポローニャ、スカラ座、コヴェント・ガーデン、プッチーニ音楽祭など一流の歌劇場や音楽祭に度々出演している。日本でも、サントリーホール『ラ・ボエーム』、トリノ王立劇場の日本ツアーなどで登場している。シャープレスはトリエステ、ジェノヴァ、スカラ座、ヴェローナ等で歌っている。



田村由貴絵 (たむら ゆきえ / TAMURA Yukie) 〈スズキ〉

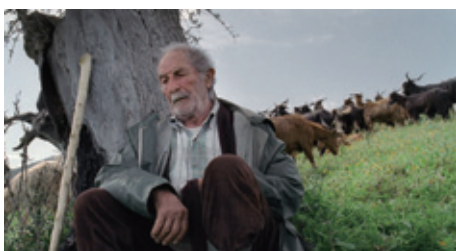
東京都出身。お茶の水女子大学及び東京芸術大学卒業、同大学院修了。2002年ニューウェーブ・オペラ『ポッペアの戴冠』オッターヴィアで二期会デビュー、その後も『ジュリアス・シーザー』（ジュリオ・チェザレ）題名役、東京二期会・ケルン市立歌劇場共同制作『ばらの騎士』『コジ・ファン・トゥッテ』で注目を浴びる。近年では08年東京二期会『エフゲニー・オネーギン』（コンヴィチュニー演出）オルガ、09年日生劇場『ヘンゼルとグレーテル』ヘンゼルで出演し、活き活きとした演唱で聴衆を魅了した。当劇場へは、06年と09年の「音楽への扉」、佐渡裕プロデュースオペラ『カルメン』（09年、兵庫・東京・愛知の3都市開催）メルセデスで出演。13年NHKニューイヤーオペラコンサートに出演。二期会会員。



ポール・コス (Paul KOS)

美術家。1942年ワイオミング州生まれ。サンフランシスコを拠点に活動。サンフランシスコ美術大学卒業。ペリエリアのコンセプチュアル・アートの実験者の一人であり、ヴィト・アコンチやブルース・ナウマンと同時代人である。シャルトル大聖堂の美しいステンドグラスを模した『シャルトル・ブルー』（1982-1986年）など著名な映像作品も多数制作し、インタラクティブなビデオ映像の先駆者でもある。本作はシンプルなビデオ作品で、サバイバル・マニュアルの様にも見えると同時に、自然の要素を操る神秘的儀式にも見えてくる。水が火を起こし、その火はまた水で消え去る…

『アイス・ファイアー』2004



ミケランジェロ・フランマルティーノ (Michelangelo FRAMMARTINO)

1968年ミラノ（イタリア）生まれ。ミラノ工科大学建築科にて、物理空間と視覚イメージの関係に興味を持ちインスタレーションや短編映画を制作。初の長編映画『IL DONO』（2003年）がアヌシー・イタリア国際映画祭グランプリ、テッサロニキ映画祭審査員特別賞など、各国の映画祭で絶賛された。長編第二作の本作『四つのいのち』はカンヌ国際映画祭ヨーロッパ映画賞を受賞している。南イタリア、カラブリア州。豊かな自然は物語の背景ではなく、それ自身が主要なキャストでもある。劇中に一切のセリフはない。老いた牧夫、仔山羊、縦の大木、そして木炭。四つのいのちがあっけなく次のいのちの糧となり、生まれ変わりのサークルが描かれる。そのさまはどこかコミカルで、『事の次第』（フィッシュリ&ヴァイス 1987年）やTV教育番組『ピタゴラススイッチ』を彷彿とさせる。

『四つのいのち』2010



福井琢也 (ふくい たくや / FUKUI Takuya)

映像ディレクター、写真家。1977年東京都生まれ。これまで監督をした短編映画は、イメージフォーラム・フェスティバル、ロッテルダム国際映画祭、シエナ国際映画祭など国内外で上映。ショートドラマや、PVなども監督している。本作はタイトルの“グージョネット”部分と“風車小屋の魔女”の2つの要素が同時に進行するドラマである。テレビの2カ国語放送の様に、2人の女性によるドラマ内の台詞と、ラジオ朗読風の説話語りと同時に聞こえる。双方の“声”はやがて接し、また離れ、映画全体のストーリーを牽引していく。彼方と此方、語られるものと映されるもの。互いの世界の喪失感が声として現れ、生死の壁や映画の約束事を超える一瞬の魔法をかける。

『グージョネットと風車小屋の魔女』2006



濱口竜介 + 酒井 耕 (はまぐち りゅうすけ + さかい こう / HAMAGUCHI Ryusuke + SAKAI Ko)

濱口は、1978年神奈川県生まれ。映画監督。神戸を拠点に活動。東京大学文学部を卒業後、映画の助監督やテレビ番組のADとして働いた後、2006年に東京藝術大学大学院映像研究科監督領域に入学。修了制作は『PASSION』（2008年）。酒井は、1979年長野県生まれ。映画監督。現在の活動拠点は東京。東京農業大学在学中に自主制作映画を手掛け、卒業後、社会人として働いた後、2005年に東京藝術大学大学院映像研究科監督領域に入学。修了制作は『creep』（2007年）。『なみのおと』（2011年）は、二人の共同監督による、東日本大震災の被災者へのインタビューによるドキュメンタリーで、人物を正面から捉えたショットにより、被災者が対話形式で当時に思い出しながら体験を語り合う構造は、観る者に意識的に聴くことを促して、体験する映画ともいべき独自性を獲得している。本プロジェクトはその後も継続し、『うたうひと』、『なみのこえ 気仙沼』、『同 新地町』（いずれも2013年）を完成させている。

『なみのおと』2011



姫田真武 (ひめだ まなぶ / HIMEDA Manabu)

アーティスト。1988年宮崎県生まれ。東京を拠点に活動。2013年、多摩美術大学大学院修士課程デザイン専攻アニメーション領域修了。『ようこそぼくです』(2011年、音楽協力：松永亜沙梨)は卒業制作として作られたアニメーションで、作者自身が幼児教育TV番組の“うたのおにいさん”を模したキャラクターとして登場。自作の歌に合わせて踊りを披露し、さらに歌の世界観をアニメーションによってより強力に増幅してゆくという構造を持っている。自作自演による個人映画、ないし私映画の系譜に位置づけられる作品とも見なさせるが、歌と踊りにアニメーションが加わってゆく相乗効果は、やや暴走気味なまでに過剰化する感もあり、これまでの個人制作アニメーションや実験映画とは違う、独自の到達を示している。本作は「第17回学生CGコンテスト」審査委員賞を受賞。以後、シリーズとして『ようこそぼくです2』(2012年)、『ようこそぼくです3』(2013年)が作られている。

『ようこそぼくです』2011



ひらのりょう (HIRANO Ryo)

1988年埼玉県生まれ。多摩美術大学情報デザイン学科卒業。セル画、イラスト、ジオラマ、CGなど異なる質感を巧みに合成し、SF的な世界観と昭和レトロ趣味が混在したような作者の脳内世界をアニメーションで表現している。日本のミュージシャンOmodakaのミュージック・ビデオでもある『Hietsuki Bushi』で文化庁メディア芸術祭エンターテインメント部門新人賞。本作『ホリデイ』は国内外で熱狂的に支持された作品。作者の幼少期の記憶が物語のディテールに散りばめられている。箱根や松島の情景は特に印象的。ヤモリの主人公と女性の悲恋を軸にして、蒸発と浸潤という水分の上下の運動が、ポップに心地良い不可解さを込めて描かれる。文化庁メディア芸術祭アニメーション部門審査員推薦作品。第17回学生CGコンテスト最優秀賞。

『ホリデイ』2011



細江英公 (ほそえ えいこう / HOSOE Eikoh)

写真家。1933年山形県生まれ。東京を拠点に活動。1952年、東京写真短期大学(現東京工芸大学)入学。美術家の瑛丸と交流を深める。大学卒業後はフリーの写真家として活動。1959年に、川田喜久治、佐藤明、丹野章、東松照明、奈良原一高らとともに写真家のセルフ・エージェンシー「VIVO」を設立。その頃に土方巽の舞踏『禁色』に出会い、土方や大野一雄と親交を深めた。1960年、個展「おとこと女」により日本写真批評家協会新人賞を受賞。同年に、唯一の映像作品『へそと原爆』を制作。その後も三島由紀夫を被写体とした『薔薇刑』や、土方巽を秋田の農村を舞台に撮影した『鎌鼬』(1969年芸術選奨文部大臣賞受賞)などを撮影。半世紀以上撮影してきた大野一雄は、2006年に『胡蝶の夢—細江英公人間写真集舞踏家・大野一雄』としてまとめられた。1998年紫綬褒章受章。2003年英国王立写真協会創立150周年特別賞授賞。2010年文化功労者に選出。

『へそと原爆』1960



加藤秀則 (かとう ひでのり / KATO Hidenori)

1991年宮城県生まれ。2009年より映画製作を開始。高校卒業を機に上京。東京を拠点に活動。多摩美術大学造形表現学部映像演劇学科在学中。主にコメディ色の強い劇映画を製作。『あの日から村々する』(2012年)が「第34回びあフィルムフェスティバル」PFFアワード入選。この中編映画は、2021年の日本を舞台に、福島原発事故を契機に原子力発電を全廃し、電力の半分が新種のクリーン発電方式「なめこ汁発電」によってまかなわれている、という設定を持つ。安全と言われている「なめこ汁発電」であるが、実は使用済みなめこ汁には、人体をカニ化させる危険性が潜んでいた。そして、発電所の事故により、人類がカニ化する事態が引き起こされ、日本に再び混乱が訪れる…。放射能という目に見えない恐怖を、身体がカニ化するというビジュアルに置き換えたり、3.11当時の政府対応を、首相を幼児に演じさせることでユーモアを交えつつ表象している。

『あの日から村々する』2012



川口恵里 (かわぐち えり / KAWAGUCHI Eri)

1989年神奈川県生まれ。2011年、多摩美術大学グラフィックデザイン学科卒業。2013年、東京藝術大学大学院映像研究科アニメーション専攻修了。横浜を拠点に活動。イラストレーター、アニメーション作家として活動中。目で見えて触ってよく知っているやさしいものを頼りに、たしかに存在する質感や空気を大切にすることをモットーに、アニメーションを制作している。多摩美術大学の卒業制作で、初めてアニメーションを手掛ける。東京藝大の修了制作作品『底なしウイナー』(2013年)は、バレーボール部員の主人公が、部活動の10分間の休憩時間に、地面に仰向けになって寝ころがり、ただ呼吸だけしていて、人間がただ肉になってしまった様な感覚に捕らわれた時、靴も靴下も脱いだ足の指の間を風が吹き抜ける爽快感を、仰角気味に足の裏を捉えるという大胆な構図で描いたユニークな作品。他のアニメーション作品に『花と嫁』(2012年)がある。

『底なしウイナー』2013



久保田成子 (くぼた しげこ / KUBOTA Shigeko)

ビデオアーティスト。1937年新潟県生まれ。1960年東京教育大卒業、渡米、その後ニューヨークを拠点に活動。1964年〈フルクサス〉に参加。ナム・ジュン・バイクのパートナーとしても有名である。ナム・ジュン・バイクの作品をサポートする傍ら、自身もTVモニターを多数使ったビデオ彫刻を制作し、マルセル・デュシャンへのオマージュ作品を発表。『ドクメンタ6』(1977年)にも出品する。1996年にバイクが脳梗塞で倒れた後も献身的にバイクの介護に付きそい、療養の様子をビデオ撮影し続けたのが本作『セクシャル・ヒーリング』である。以下はナム・ジュン・バイクの回顧録『わが愛、白南準』の一節である。「成子は僕の生命を六年延長し、その六年間、僕は僕の人生の中の最高点を獲得した。よって、ここにこれを証明する。」

『セクシャル・ヒーリング』1998



三宅 唱 (みやけ しょう / MIYAKE Sho)

映画監督。1984年北海道生まれ。東京を拠点に活動。2007年映画美術学校フィクションコース初等科修了。2009年一橋大学社会学部卒業。2009年短編『スパイの舌』が「第5回CO2」オープンコンペ部門最優秀賞受賞。2010年初長編作『やくたらず』を製作・監督(「第6回CO2」助成作品)。2012年度ロカルノ国際映画祭インターナショナル・コンペティション部門に正式出品された長編第二作目の『Playback』は、震災直後の茨城県水戸市がロケ地となっている。東京と水戸、中年男の現在と高校生との記憶、俳優村上淳とキャストのハジ、カメラは縦横無尽に異なる次元を行き来して、観客を“映画”という危うい記憶の旅に誘う。同じ設定も何度も演じる俳優としての“生”が、面影と化した旧友との記憶を呼び覚ます。細やかな編集によって演出された“繰り返し”が、奇想天外ともいえる設定にリアリティを与えている。「第27回高崎映画祭」新進監督グランプリ受賞。

『Playback』2012



ビル・モリソン (Bill MORRISON)

映像作家。1965年シカゴ(アメリカ)生まれ。ニューヨークを拠点に活動。1989年クーバーユニオン芸術学部卒業。劇場、美術館、コンサートホールなどで上映多数。既存の映画フィルムを再利用する“ファウンド・フッテージ”という手法を用いる。その多くは人目に触れることのない古い無音のフィルムであり、朽ちて画像が歪んだり変色しているが、今日の我々には新鮮で美しいものに映る。『The Miners' Hymns』ではアイスランドのヨハン・ヨハンソン、『Dicasia』ではアメリカのマイケル・ゴードンといった著名な作曲家がサウンド・トラックを担当している。本作『トリビュート・ハルス』はデンマークの作曲家でパーカッションのサイモン・クリステンセンが担当。水、土、火、風の四大元素に基づく四部構成で、20世紀のレクイエムを描いた。

『トリビュート・ハルス』2011



室谷心太郎 (むろや しんたろう / MUROYA Shintaro)

1987年青森県生まれ。東北芸術工科大学デザイン工学部情報デザイン学科映像コース卒業。株式会社共同テレビジョン勤務の傍らショートフィルムを制作。2011年『あきらめた友へ』が第9回NHKミニミニ映像大賞グランプリ受賞。2013年『こちら宇宙郵便局第三集配エリア営業所』制作。本作『平成アキレス男女』は、空想怪奇特撮ドラマの設定を援用したラブストーリーである。パニックに陥った街から逃げてきた男が不思議な女性に出会う。映画のフレームの外は戦場である。観客は轟音でしか類推できない。フレームの中では小さな恋が生まれつつある。フレーム中外で全く異なる事態が起こっていくのだが、全ての鍵は当の女が握っていたことに男は気づく。

『平成アキレス男女』2011



ぬQ (ぬきゅう / Nukyu)

アーティスト。東京生まれ。東京を拠点に活動。多摩美術大学大学院修士課程デザイン専攻グラフィックデザイン領域修了。「美しく、面白い」作品を目指し、アニメーションやイラストレーション、漫画を並行して制作している。初めてのアニメーション作品『ニュー〜東京音頭』(2012年)は、近くにあるように見えながら、遠くにあつてなかなか行き着くことが出来ない、目映いばかりに輝く東京都心への屈折した心情を出発点に、シュルレアリスムを想起させるような、アニメーションならではの飛躍に富んだ、奔放な展開を提示し、一躍、注目を集めた。都市や建築空間への独自の視点を提示した作品として見ることも可能だろう。本作品は「第19回学生CGコンテスト」最優秀賞、「第16回文化庁メディア芸術祭」アニメーション部門審査委員会推薦作品を、短縮版が「マルチメディアコンテンツアワード2012」企業賞、「第2回予告デミー賞」銀賞を、それぞれ受賞している。

『ニュー〜東京音頭』2012



パールフィ・ジョルジ (PALFI Gyorgy)

1974年ハンガリー生まれ。ブダペストの映画・演劇アカデミー卒業。初の長編映画『ハックル』(2002年)でヨーロッパ映画賞新人賞、サンセバスチャン国際映画祭最優秀新人監督特別賞など、20もの賞を受賞。同作はアカデミー賞ハンガリー代表作品となった。長編第2作目となる『タクシムリア ある剥製師の遺言』では、妻であるゾーフィア・レットカイと脚本を手がけ、2004年サンダンスNHK国際映像作家賞ヨーロッパ映画部門賞を受賞。また、2006年カンヌ国際映画祭・ある視点部門でも受賞している。本作『ファイナル・カット』は古今東西の劇映画450本をリミックスしたファウンド・フッテージ作品である。男女が出会い、恋に落ち、ケンカをし、つかの間離れ、よりをもとし、奪い合い、愛し合い、殺し合い、また出会う…緻密な編集と膨大な情報量に圧倒される華やかなエンタテインメント作品。

『ファイナル・カット』2012



アリソン・シュルニック (Allison SCHULNIK)

美術家。1978年サンディエゴ生まれ。ロサンゼルスを拠点に活動。カリフォルニア芸術大学で実験映画を学ぶ。油絵や陶器の彫刻で各国のグループ展、個展に名を連ねる一方、粘土を使った立体アニメーションを制作して映画祭(オランダ・アニメーション映画祭、メルボルン国際映画祭、アナーバー国際映画祭など)にも多数出品している。制作の手段は変わってもその世界観は一貫している。不定形な人物と動物が共感する世界。SF的であり神話的でもある。本作『フォレスト』でもカラフルな粘土を多用した不可思議な人物が登場し、その鏡像と森の中で遭遇することで人物にも、森にも変身の契機が訪れる。楽曲には、自身の2008年の作品『Hobo Clowns』で曲の使用を依頼したバンド「グリーズリー・ベア」とタッグを組んでいる。

『フォレスト』2009



SjQ++

SjQは1999年に結成した即興パフォーマンス・プロジェクト。魚住勇太(ピアノ)、米子匡司(トロンボーン)、ナカガイトイサオ(ギター)、アサダワタル(ドラム)、大谷シュウヘイ(ベース)そしてメンバーが作成した人工生命(電子音担当)が参加。2012年、Kezzardrix(映像)を迎え、SjQ++として活動開始。即興演奏の音をリアルタイムで解析し、シンクロした映像を投影するライブ・パフォーマンスを展開している。音楽に合わせた絵を出すVJや、映画に音楽をつける作業と全く異なり、映像と音楽が動的に関わっていくダイナミックで新しい体験を提供。国内外で評価が高く、2013年度アルス・エレクトロニカ/デジタル音楽・サウンドアート部門“Award of Distinction(優秀賞)”受賞。その国内凱旋公演となる。

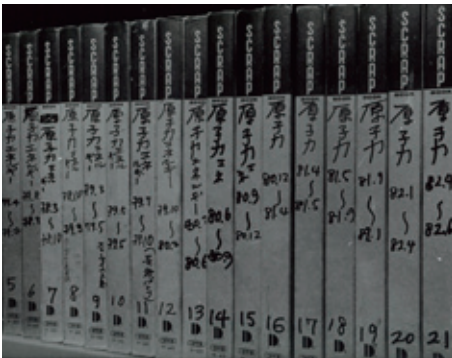
arc(ライブ・パフォーマンス)



エマ・ドウ・スワーフ+マーク・ジェイムス・ロエルズ (Emma De SWAEF + Marc James ROELS)

エマ・ドウ・スワーフは、1985年アントワープ(ベルギー)生まれ。マーク・ジェイムス・ロエルズは、1978年ヨハネスブルグ(南アフリカ)生まれ。ともにアントワープを拠点とするアニメーション作家。初の共同制作となる『オー、ウイリー』(2012年)は各国で上映され、オランダ・アニメーション映画祭、ザグレブ国際アニメーション映画祭でグランプリ受賞。また、メディア・アートの祭典アルス・エレクトロニカで優秀賞を受賞。本作はフェルト生地を多用した人形による立体アニメーションであり、毛羽立った表面の質感が独特の空気感を演出している。未熟と成熟、獣性と理性、この世とあの世を行き交う太っちょの主人公ウイリーの魂の変遷。長年ヌーディスト・コミュニティにいた母の死をきっかけにしたウイリーの精神的危機を、時にシリアスに、時にコミカルに描く。

『オー、ウイリー』2012



土本典昭(つちもと のりあき / TUCHIMOTO Noriaki)

記録映画作家。1928年岐阜県生まれ。小学生の頃、東京に移住し、以後、東京を活動拠点とする。1956年、岩波映画製作所に入社、ドキュメンタリー制作に携わる。1957年にフリーとなり、1963年『ある機関助手』で監督デビュー。もともと、国鉄のPR映画として企画された作品であるが、蒸気機関車を運転する人々の過酷な労働環境をも写し出す作品となり、反響を呼ぶ。1965年、水銀汚染により発生した水俣病のTV番組取材のため、熊本県水俣市を初めて訪れる。以後、長期に渡り水俣に滞在し、1971年『水俣—患者さんとその世界』を発表。その後も継続的に取材を行い、水俣関連の映画は計14本を数える。土本にとってのライフワークとなった。原子力問題にも早くから関心を持ち、当時、取材を拒否された原子力発電所を題材に映画を制作するため、新聞での報道を丹念に追跡することにより、問題点を浮き彫りにしたユニークな作品『原発切抜帖』(1982年)を手掛けた。2008年没。

『原発切抜帖』1982

© 青林舎



チャオ・イエ(ZHAO Ye)

映画監督。1979年北京生まれ。北京を拠点に活動。北京電影学院アニメーション学科で映画を学んだ、ユニークな経歴を持つ。2004年、同学院同学科卒業。同年の短編アニメーション『探薇』が初監督作品となる。長編デビュー作『馬鳥甲(マー・ウージャ)』(2007年)で、「第4回中国独立影像年度展」最優秀賞を受賞。長編第2作『ジャライノール』(2008年)は、蒸気機関車の最後の聖地とも呼ばれたジャライノール炭坑を舞台に、引退を決意した老鉄道機関士と、年の離れた若い後輩の警士との心の交流を、素人を俳優として起用することにより、フィクションともドキュメンタリーともつかない独特のタッチで描き出し、中国のワン・ピン、ポルトガルのペドロ・コスタに続く、ビデオにより映画を撮る新世代の監督の一人として評価を得る。2010年の「なら国際映画祭」では、映画監督・河瀬直美が立ち上げた「NARativeプロジェクト」で制作した『光男の栗』(主演:桃井かおり)をプレミア上映した。

『ジャライノール』2008

AMR (Art Media Room)

出品作家:浅井雅弘、前川宗睦、河村るみ。作家3人による、「まちとの関係性」をテーマにしたプロジェクト。

ASIT

間伐材を再編して町の中に森をつくり、新たな風景を生み出す。

長者町くん (CHOJAMACHI-KUN)

長者町くんが、あいちトリエンナーレ2013長者町会場をPR。

カリ・コンテ (Kari CONTE)

出品作家:ララ・アルマルセギ、マリ・レイナール、ほか。名古屋での調査をもとに、土地の変遷について考察したグループ展。

EAT&ART TARO + 東山佳永 (EAT&ART TARO + TOUYAMA Kae)

記憶とともに削られた氷を食べてもらいながら、祖父と孫の物語を聞いてもらう。

増山士郎 (MASUYAMA Shiro)

アイルランドで失われつつある伝統的羊毛産業に着想を得たプロジェクト。写真と映像による作品を展示。

松藤孝一 (MATSUFUJI Koichi)

紫外線を当てると美しい蛍光を発するウランガラスによる作品を展示。

水野里奈 (MIZUNO Rina)

フランスに実在するシュヴァルの理想宮を題材に、絵画と絵画モチーフのオブジェを展示。

Orrorin

情報の振れ幅をテーマに、新たな情報基地が出現。

新藤君平 (SHINDO Kumpei)

出品作家:古川あいか。古川の過去作品を、インスタレーションとして再構成した展示。

タムラサトル (TAMURA Satoru)

“愛”という形にベアリングとチェーンが組み立てられ、“愛”という形に動く作品。



AICHI
TRIENNALE
2013

お問い合わせ

あいちトリエンナーレ実行委員会
〒461-8525 愛知県名古屋市東区東桜1-13-2 愛知芸術文化センター 6階
TEL:052-971-6111 FAX:052-971-6115
E-mail:geijutsusai@pref.aichi.lg.jp